

## スコットランド啓蒙期の主要学・協会、クラブについて —付・関連刊本及びMSS. リスト—

### まえがき

1976年秋から1年間、私は文部省の在外研修員として、ハーヴァード大学のクレス・ライブラリで研修中であった。この間に、クレスや、ハーヴァードのワイドナー・ライブラリ(Widenerは中央図書館)を始めとして北東部の大図書館には意外にスコットランド刊本が多いことに気が付いた。とくにプリンストン大学の貴重書部で顕著であった。キュレーターの説明では初期の学長がスコットランド人だったから、ということであったが、この時、私はまだJohn Witherspoon(第6代学長)を知らなかった。

この頃刊行されたチトニス(Chitnis, Anand C.)の *The Scottish Enlightenment: a social history*. London, 1976 を読み、チトニスを介してさらに、マッケルロイ(McElroy, Davis D.)の *Scotland's age of improvement: a survey of eighteenth century literary clubs and societies*. Washington State Univ., 1969 (エディンバラ大学学位論文1952年を補筆改訂したもの)を読んだ。この段階ではまだEnlightenmentという用語は使用されていない。社会史的な研究であるが、原文献を豊富に駆使して、すぐれた研究となっている。マッケルロイを読んで結局、在留中に学会・クラブの書誌作成を手がけることになった。〔産業〕改良団体の方は大半見送ったが、理由は量が多すぎること、会史、議事録の類が乏しいことの2点である。マッケルロイとチトニスから抽出した会名カードの中から、さらに主要な学会・クラブにしほって、1977年6月に、スコットランドに飛んだ。日程のつごうで、滞在期間が1週間しかとれなかつたため、スコットランド国立図書館(National Library of Scotland, 以下NLS)、エディンバラ大学図書館(Edinburgh University Library, 以下EUL)、グラースゴウ大学図書館(Glasgow University Library, 以下GUL)の3ヶ所を原資料のみに限定して調査した。この時、調べ残した資料について、エディンバラ大学に滞在される予定の福島大学経済学部の田添京二教授(当時)に面倒な調査をお願いすることになった。快くお力添えいただいたにもかかわらず、15年近くも放置し、今更ながら赤面の到りである。何とかまとめることができ、内心ほっとしている。先生には15年分のお礼を申し上げたい。さらに、大阪経済大学の竹本洋教授(当時)と『経済資料研究』編集部にも厚くお礼を申し上げなければならない。先生には、今回の印刷のきっかけを作つていただいた。じつは、長い間、「お蔵入り」していた私の仕事を「虫干し」する機会が2度あった。1988年11月の第8回西洋社会科学古典資料講習会(於一橋大

学社会科学古典資料センター)と、翌89年10月21日の西洋古版本研究会(於武藏大学)に、「スコットランド啓蒙期の出版物」についてお話をする機会を与えていただったのである。一橋大学で、主として個人著作(学協会とはべつに調査してあつたもの)をとり上げ、研究会の方で、学協会・クラブ関係を報告させていただいた。この後の方の配布資料が竹本先生のお目にとまった、というわけであった。まだまだ穴だらけの貧しい成果でしかなく、公表に値するのかどうか不安でもあるが、解題の方は、元々、英文でまとめてあったものを、今回、全面的に補筆して書き改めた。それをせめてもの救いとしたい。

貧困な後進国でしかなかった18世紀スコットランドから、突如として(のように見える)、産業、学問、文化のあらゆる領域で爆発的なエネルギーが噴出した。活動の舞台は、政治、経済、法律、医学、農業、工業、技術のみならず、建築、都市計画、大学、博物館、植物園などの文化インフラ、百科辞典の編集、雑誌の刊行、そして学協会、クラブ活動と、生活領域のすべてにわたっていた。そして、「エディンバラの街角に佇めば、たちまちのうちに50人の天才、学者を揃まえることができる」と、同時代人のウィリアム・スメリーが豪語するほど多数の、すぐれた学者、文人の群衆を輩出したのである。ウォルター・バジョットがアダム・スマスを評して、「野蛮人(の状態)から、立ち上ってみたらスコットランド人になった」と言ったというが、まさにこの時代全体の評言としても適切なのではなかろうか。そして又、この時代の、歴史の舞台からの消え去り方がユニークであった。この時代の生んだ巨人たちの死を超えることができなかつたのは止むを得ないとしても、「他の国では啓蒙は、名譽ある記憶と多くの論争をあとに曳きながら次第に昏れていったのに、スコットランドでは、パンと激しい音をたてて立ち去つた。そして申し合わせたかのように、それきり忘れられてしまった」<sup>1)</sup>。

近年、この時代をひとくくりにして、「スコットランド啓蒙期」と呼び、内外の研究者の強い関心を惹きつけている。時代の巨人スマスの経済学や、ヒュームの哲学等に関する個別研究の分野では、多大の研究成果が蓄積されてきたのは言うまでもないが、啓蒙期全体を視野に入れた研究が始めたのは、たかだか20数年のことに過ぎない。[スコットランド]啓蒙の時期をいつからいつまでと見るか、研究者によって一定しないが、1730年前後から、aftermathまでふくめれば1820年頃までと考えてもよいのではないであろうか。最盛期を1760年代～90年代とする点ではほぼ一致している。しかし始めと終わりについては、1707年の合邦(the Union)以後とする人もいるし、終わりはウォルター・スコットの死(1832)で区切る人もいる。デヴィッド・ダイヘズ(David Daiches)は啓蒙期を1730-1790と見るが、啓蒙の終わりを19世紀にまで持ち込むのは、この世紀とつづく25年間は変化が激しく多様な時代だから、単一の文化的運動の時代と規定するのには無理がある<sup>2)</sup>。

としている。又、次のようにも言う。「ナポレオン戦争の霧が晴れると世界はウォルター・スコットとコウバーン卿と、エディンバラ・リビュー（第2期）の時代になった。この時代は18世紀後半のリテラーティに多くを負うているし、文学でも批評の分野でも出色の時代もあるが、前世紀のさまざまな思想家たちが共有していた、協調と改良という偉大な統合的 ideals を失ってしまった」。<sup>3)</sup>

本稿でとり上げた学協会やクラブは、王立学会となって現代まで存続しているものを除けば、大半が18世紀末までに消滅しているから、時期的には問題ないのだが、一つボーダー・ラインにあるのはFriday Club (1803年創立)である。このクラブは、啓蒙の文人に含めるのが疑問視されているスコットが、第2期エディンバラ・リビューを始めたフランシス・ジェフリや、シドニー・スマスと共に創った会である。会員には、まさに、啓蒙中枢世代のドゥーガルド・ステュアート、ジョン・ミラー、ジョン・プレイフェアらがいたし、少し若いところで、ヘンリ・マケンジーやトマス・ブラウンも入っていた。ヘンリ・ブルームも会員であったが、彼は啓蒙期の下限と言われている人物である。フライデイ・クラブは啓蒙期末のクラブと言うべきではなかろうか。

啓蒙活動が展開された主な地域は、東のエディンバラから西のグラースゴウに至るロウランドのベルト地帯で、北限はアバディーンである。これより以北はジャコバイトの本拠地であった。啓蒙の下支えとなった改良運動のうち、中心となった農業改良は、主としてハイランド地方を対象として、産業・工芸技術改良はロウランド中心に行なわれた。

なお、スコットランドの学協会関係出版物書誌として通常TerryとMathesonの目録を思いつく向きが多いと思われるが、私がチェックした限りでは、少し(Mathesonは完全に)時期がずれていて、啓蒙期の学協会文献の検索にはほとんど役に立たなかった。

Terry, Charles Sanford, *A catalogue of the publications of Scottish historical and kindred clubs and societies, and of the volumes relative to Scottish history issued by His Majesty's Stationery Office, 1780–1908. With subject index.*

〈注〉

- 1 ) Davie, George E., *The Scottish Enlightenment*. London, 1981. p. 31.
- 2 ) Daiches, David, Peter Jones and Jean Jones (eds.), *A Hotbed of genius : the Scottish Enlightenment 1730–1790*. Edinburgh, 1986. p. 1.
- 3 ) *ibid.*, p. 40.

以下、解題は、地名(I. アバディーン, II. エディンバラ, III. グラースゴウ)ごとに、会名をアルファベット順に配列し、それぞれに参考文献と所蔵機関、継

続期間、創設者などを記載した。

## I. アバディーン(Aberdeen)

### 1. Philosophical Society of Aberdeen (アバディーン哲学協会) = Wise Club.

参考文献 1. Minutes of the Philosophical Society in Aberdeen, 1758–1771 (MS)

[AUL]

2. Transactions of ... Vol. 1–5. 1830–1884. [Widener; NLS; AUL]

継続期間：1758–1773

創 設 者：トマス・リード(Thomas Reid)<sup>1)</sup>、ジョン・グレゴリー(John Gregory)<sup>2)</sup>

1758年にアバディーン哲学協会として創設されたが、Wise Club と言う通称で知られている。会の起源は、Theological Clubまで溯ることが出来る。この会の解散後、当時アバディーンに住んでいたリードとグレゴリーの二人が、より大規模の会を作る必要性について話し合い、文学的・哲学的諸問題を議論するための場として、哲学協会を設立した。当時哲学と言う用語は、ひろく学問一般と言うほどの意味で使用されている。会員は、当時のアバディーンのリテラーティ、多くは Marischal College の教授たちであって、1759年から学長を勤めたキャンベル(George Campbell)<sup>3)</sup>、教授会議長(Dean of Faculty)の David Skene<sup>4)</sup>、自然哲学教授 George Skene、道徳哲学教授 James Beattie<sup>5)</sup>およびキングズ・カレッジの道徳哲学・神学教授 Alexander Gerard<sup>6)</sup>らが主要なメンバーであった。すべての会員に対して、最低年に一つの論文を執筆することが義務とされ、論文の主題は厳密に哲学的であることが求められた。もし、会の活動が、言語、歴史、もしくは哲学上の議論のみに終始するがあれば、それは会の目的に離反するものと見做された。会員たちの著作、論文のテーマは哲学の枠を破って多岐にわたり、啓蒙期における他の人文的な学協会の一般的傾向と選ぶところがなかった。

ヒュームとアバディーン哲学協会との関係については、ヒュームの最大の攻撃者として知られるビーティを除けば、会員たちは概してヒュームの懷疑主義に対して同情的であり、ヒュームと個人的な親交を保つ者も少なくなかった。とりわけ、キャンベルとリードはヒュームの強力な論敵で、哲学上の立場は対極にあるにもかかわらず一、ヒュームとの交際には熱心でさえあったと言われる。

スコットランド啓蒙期を通じて、グラースゴウの Literary Society (後出) が18世紀のもっとも印象的な文学クラブであったとすれば、アバディーンの哲学協会は、1773年の終焉に至るまで、その高い学問的生産性のゆえに、明らかに時代のトップ・ランクの水準にあった学会として評価することができよう。

〈注〉

- 1) Thomas Reid, 1710-1796. スコットランド常識哲学派(Scottish Common-Sense School)の父と呼ばれ、ヒュームの論敵の一人である。弟子にDugald Stewartがいる。アバディーンのKing's Collegeの全科指導教官(regent)から哲学の教授に進み(1751-64), アダム・スミスがグラースゴウ大学の道德哲学教授を辞した後、その座を襲った(1764-96)。
- 2) John Gregory, 1724-1796. 医者。スコットランドの有名な知識人家系の一員である。祖父James(1638-1675)はニュートンの友人で、エдинバラ大学初の数学教授。反射テレスコープを発明した。祖父の弟David(1661-1708)も同じくニュートンの友人かつ後援者であり、自身はすぐれた天文学者であった。1683-1691年までエдинバラ大学の数学教授を勤め、イングランドよりはるかに早く、スコットランドにニュートン理論を導入した。のちオクスフォード大学のSavilian天文学教授に転ずる。父JamesはアバディーンのKing's Collegeの医学教授、その後をJohnの兄、次いでJohn自身が継ぎ、さらに息子Jamesへと引き継いだ。Johnは1766-1773年エдинバラ大学臨床医学教授に転ずる。
- 3) George Campbell, 1719-1796. スコットランド教会の牧師で、モダレーツの人。Marischall Collegeの神学教授。1759-92年、学長。著作*A dissertation on miracles*, Edinburgh, 1762はヒュームの懷疑論に対する反論の書として知られるが、著作中もっとも重要なものは、*The philosophy of rhetoric*. 2 v. London, 1776である。Daichesによれば、啓蒙期言語問題に関する最重要の産物と評価されている同書は、キャンベルがアバディーン哲学協会の例会で読んだペーパーから発展したもので、ヒュームが死の直前キャンベルから送られてきたこの書を読んでいるところに、偶然ボズウェル(James Boswell, 1740-1795)が訪ねあわせたと言う。Cf. Daiches, David & others (eds.), *A Hotbed of genius : the Scottish Enlightenment 1730-1790*. Edinburgh, 1986. p. 22.
- 4) David Skene, 生没年不明。アバディーンの医者で、スコットランド北東部の自然科学分野の草分け的存在であった。
- 5) James Beattie, 1735-1803. 常識哲学派の中心人物の一人。その主著の一つ、*An essay on the nature and immutability of truth, in opposition to sophistry and scepticism*. Edinburgh, 1770は、ヒューム攻撃の書である。初版はエдинバラの出版業者に引受け手がなかったため、友人たちの手によって私家版として出版された。1771年の第2版は、非常な成功をおさめ、ビーティに、'Royal favour' (ジョージ三世のお賞めの言葉)と、オクスフォー

ド大学の名誉博士号、および年金をもたらした。エドマンド・バークとサミュエル・ジョンソンの讃辞にも浴した。ヒュームは、この書を評して a horrible large lie in octavo と述べている。グラースゴウ大学図書館に残る第2版刊本は、ジョージ三世が妃の侍医であった William Hunter に与えたもので、フライリーフにハンターの自筆メモが残されている。ハンターについてはグラスゴウの Hunterian Museum をみよ。

- 6) Alexander Gerard, 1728–1795. King's College の道徳哲学・神学教授(1751–95)。主著 *An essay on taste*. 1759 は Edinburgh Society for the Encouragement of Arts, Sciences, Manufactures & Agriculture in Scotland (後出)の下部委員会である、Belles Lettres & Criticism Committee の1758年度懸賞第1位授賞作。のちに、カントはこの書を、美学のもっともすぐれた書の一つであると讃えた。

## II. エティンバラ (Edinburgh)

### 1. Aesculapian (Society)(イースキュレイピアン)、のち Harveian Society(ハーヴェイアン)

- 参考文献 1. Carminum rariorum macaronicorum delectus: ... ed. by Andrew Duncan] Edinburgi, 1813. [Widener; NLS]  
2. History of the Aesculapian Club, n.d. [EUL; NLS (copy)]  
3. Records of the Aesculapian: with supplement to 1906 [by John Smith]. Edinburgh, Printed for the Aesculapians by Frank Murray, 1888. [EUL]  
4. Finlayson, C.P., Records of Scientific and Medical Societies preserved in the University Library. Edinburgh, 1958. *Bibliotheca*, 1.  
5. Ritchie, Robert Peel, *The early days of the Royal College of Physicians, Edinburgh*: the extended oration of the Harveian Society, delivered at the 114th Festival by the President. Edinburgh, 1899.

継続期間 : [1773]–[1906?] ca. 1780, Harveian

創設者 : アンドルー・ダンカン (Andrew Duncan, Sr., 1744–1828)

Aesculapian Society, Filiores Aesculapii は名の如く医学協会(医学の神アイスクラピウスの息子たち)である。1773年にダンカンが創設した。ダンカンは医者

で、モンロー（Alexander Monro, *Secundus*）の伝記<sup>1)</sup>作者である。モンローは、モンロー・ダイナスティと呼ばれる三代にわたる医学者の家系で、二世は1758年に、父 Alexander Monro, *Primus* の後を継いでエディンバラ大学の解剖学・外科学教授となる。ダンカンは、1780年（もしくは、1781、又は1782年とする方が適切かもしれない。創設年については後述する）に、もう一つ別に医学生のための同好クラブ Harveian Society を創り、没するまで通算47年間にわたってこの二つの会の書記を勤めている。ハーヴェイアンの会員としては、ダンカンのほかに Alexander Hamilton や Robert Graham がいた事が判っているが、イースキュレイピアンの会員については現在のところ調査が及んでいない。

ウィリアム・ハーヴィによる血液循環の発見にちなむハーヴェイアンは Circulation Club とも呼ばれたが、それは会の綱領中にある ‘... to commemorate the discovery of the circulation of the blood by the circulation of the glass’ と言う少々ふざけた文章に由来するものであるらしい。イースキュレイピアンの方は、より真面目な専門学会として、1777年<sup>2)</sup>から、当年度のもっともすぐれた科学論文に賞を与えていた。応募者はひろくイングランドや、西インド諸島、ブラジル、北米などからも集まつたと言う。しかし、小規模の専門学会として忽ち財政難におち入り、より財政基盤の健全なハーヴェイアンに支援を求めて、1780年からは授賞に際しハーヴェイアンの名称を使った。1782年には正式に、Harveian Society と会名変更を行なった<sup>3)</sup>。

イースキュレイピアンの創設年及び正式会名については、本稿では明確にすることが出来ない。マッケルロイ文献では、いずれの点についても明記されていない。この項の標題の会名を一応 Aesculapian Society と定めたが、これは参考文献1を所蔵するハーヴィード大学ワイドナー図書館(Widener Library)と、NLSの目録のヘディングに基づいている。Carminum rariorum... で始まる長いラテン語のタイトルの最後が filiorum Aesculapii としめくくられている。したがって、タイトルからは会名が society とも club とも識別出来ない。編者は Andrew Duncan と角括弧中に表示しており、ヘディング、編者名共に、図書館側の調査によるものであることを示している。

Aesculapian Club なる名称が参考文献2のタイトル中に示されており、参考文献3ではタイトルからは不明であるが、この2点の目録上のヘディングは Aesculapian Club となっている。これらはいずれも EULの所蔵である（[参考文献2] のコピーが NLS にあるが、恐らく EUL 所蔵本からのコピーであろう）。これ以外に、W. J. スチュアートの研究文献<sup>4)</sup>がワイドナー図書館にあり、タイトルでは Club となっている。したがって、Aesculapian Club の方が正式名称であるかもしれないし、あるいは全く異なる会であるかもしれない<sup>5)</sup>。私は、同じ時期のエディンバラに二つも Aesculapian を名乗る会が出現する可能性は低いと見て、

## 遺 稿

Society と Club は同一機関と判断した。

創設年の1773年は、参考文献4のタイトルに拠った。参考文献1-3は、いずれもマッケルロイの参照文献中には挙げられていない。マッケルロイが、イースキュレイピアンとハーヴェイアンの記述に関連して使用している文献は、主としてウェミス(Wemyss, H. L.)<sup>6)</sup>とヒュー(Huie, Richard)<sup>7)</sup>の2点であり、前述のステュアートも使われた形跡がない。イースキュレイピアンからハーヴェイアンに転換する年については、マッケルロイは‘Aesculapian later Harveian’と明記しており、その時点を1780-82年と述べているのは、おそらくヒュー文献に拠ったものであろう。ハーヴェイアンの始終年についてチトニスは1752-ca.1810としているが、1752年は1782年のミスプリントか、もしくはチトニスの誤認であろう。1752年には創始者ダンカンはわずか8歳に過ぎない。終息についても1810年ではなく、ヒュー文献から察すれば少なくとも1829年には健在であり、参考文献5のタイトル中のSupplement部分がHarveianに転じて以後のことであるならば、1906年まで生き延びていたかもしれないのである。

### 〈注〉

- 1) Duncan, Andrew, *An account of the life, writings, and character, of the late Dr. Alexander Monro Secundus*, delivered as the Harveian oration at Edinburgh, for the year 1818. Edinburgh, 1818.
- 2) McElroy, *op. cit.*, p. 140.
- 3) *ibid.*, p. 140.
- 4) Stuart, W. J., *History of the Aesculapian Club*. Edinburgh, 1949.
- 5) ‘Aesculapian…’という団体名について、NUCでは‘Aesculapian Society, London’と‘同Wabash Valley’の2点のみ、Edinburghの同名の会、あるいはAesculapian Clubは皆無である。B.M.の方はEdinburghの下にも、Aesculapianの下にも1点も検索することが出来なかった(いずれも本体のみ)。
- 6) Wemyss, H.L., *A record of the Edinburgh Harveian Society*. 1933.
- 7) Huie, Richard, *Harveian Oration for 1829: Being a tribute of respect for the memory of the late Andrew Duncan ... Read at the Forty-Eighth Anniversary of the Harveian Society of Edinburgh, of which Duncan was the Founder*. 1829.

## 2. Belles Lettres Society (純文学クラブ)

- 参考文献 1. Notes and speeches on questions debated in the Belles Lettres Society. (Written by William Lothian). (MS.) [NLS]  
2. Proceedings, 1759–61. (MS.) [NLS]  
3. エディンバラ全体のクラブに関しては、Literary and philosophical societies of Edinburgh during the 18th century. *Hogg's Instructor*, 8 (1852). Edinburgh.

継続期間：1759–1764

創設者：ジェームズ・グラント (James Grant)<sup>1)</sup>他5名

純文学クラブと言うほどの意味の、Belles Lettres協会が創設された1759年と言う年は、Select Society(後出)が絶頂期を迎えた時期でもあった。グラントは創設後初代の会長に選任され、会は毎週金曜日に開催された。会の運営はきわめて真摯で、会員は各自の持ちテーマで報告することが義務付けられ、報告に続いて討論が行なわれた。欠席すると罰金が課されたが、連続4回の欠席では退会処分という厳しい規則であった。入会審査、手続き等も厳正であったが、少数のすぐれた人物に対しては、名誉会員の地位が与えられた。この中に、ヒューム、William Robertson<sup>2)</sup>、アダム・ファーガソン(Adam Ferguson)<sup>3)</sup>、ジョン・ホープ(John Hope)<sup>4)</sup>、John Runnels(アメリカ人)、ロージアン(William Lothian)<sup>5)</sup>らがいた。

きびしい綱紀にもかかわらず、1761年頃までは文学クラブは高水準の活動を維持することができた。しかし、1764年頃<sup>6)</sup>を境として、会の消息は突然にとだえてしまう。その原因是はっきりしないが、恐らくは、1760年代に起った金融危機によるものであろうと推定される。この時期にSelect Societyや、そこから派生した二つの会、その他多くのクラブが運命を共にしている。

〈注〉

- 1) James Grant, 1743–1835. 弁護士。Henry Erskine, James Macintosh, Francis Jeffey(いずれも後出)らと親しかった。父Alexander Grantは1745年のジャコバイト。
- 2) William Robertson, 1721–1793. 歴史家。スコットランド教会の牧師で、モダレーツのリーダーの一人。1762–93年エディンバラ大学長、Royal Society of Edinburgh(後出)の設立に力があった。
- 3) Adam Ferguson, 1723–1816. 哲学者。スコットランド教会の牧師で、モダレーツのリーダーの一人。1757年、ヒュームの後任としてAdvocate's Libraryの

## 遺 稿

司書に就任。のちにエディンバラ大学教授。Advocate's Libraryについては Philosophical Society の項を参照。

- 4) John Hope, 1725–1786. エディンバラ大学植物学及び 'Materia medica' 教授。
- 5) William Lothian, 1740–1783. Belles Lettres Society の討議テーマについての自筆メモ(参考文献 1)が NLS に残っている。マッケルロイは、ロージアンが書いた MS. を使っているが、参考文献 2 の *Proceedings* の方は記録していない。
- 6) チトニスによれば、Belles Lettres Society の 1764 年 12 月 14 日までの記録が NLS に残存していることになっているが、文献名が特定できない。参考文献 7 の *Proceedings* を指すものと思われるが、私が NLS の目録によって検索できたのは 1761 年までである。しかし、マッケルロイによつても(p. 110), Belles Lettres の終焉は、1764 年とされている。

### 3. Botanical Garden のち Royal Botanic Garden

- 参考文献 1. Catalogus arborum et fructicum in Horto Edinensi crescentium.  
Anno 1778. Edinburgh, 1778. [EUL]
2. Index stirpium officinalium ut in Horto Regio Botanico  
Edinburgensi, numero unicuique Juxta apposito, designantur.  
(Edinburgh, ca.1780) [NLS]
3. Fletcher, Harold R. & William H. Brown. *The Royal Botanic Garden Edinburgh*, 1670–1970. Edinburgh, HMSO, 1970

継続期間：1670 +

創設者：特定できない

Royal Botanic Garden として現在も継続しているこの植物園は、早くも 1670 年に誕生している。この時期は、農業を中心とする産業や工業の改良運動の準備期にあたり、医学分野ではシッポルド(Sir Robert Sibbald)<sup>1)</sup>、ピトケアン(Archibald Pitcairne)<sup>2)</sup>、バルフォア(Andrew Balfour)<sup>3)</sup>、Charles Alston<sup>4)</sup>、William McNab<sup>5)</sup>らが、エディンバラの医学教育の基礎を布きつつあった。

植物学は臨床医学、外科学、薬学などと密接に結び付いており、エディンバラにはすでに 18 世紀すなわち、啓蒙期以前に、Botanical Garden のほか二つの植物園が開園していた。The Physic Garden と King's Garden at Holyrood がそれであり、上記の人物中のシッポルドとバルフォアが前者の創設に関わっている。

エディンバラにおける植物園の開花はグラースゴウよりも一世紀以上早かつた。このように早い時期での植物学の進展が、その後のエディンバラ医学の隆盛<sup>6)</sup>

を決定的なものとし、エディンバラ医学はスコットランド啓蒙期のハイライトを浴びて、その中心的な役割の一端を担うこととなったのである。

〈注〉

- 1) Sir Robert Sibbald, 1641-1722. ライデンとパリに学び、1662年フランスのアンジェ大学でDr.を取得。アンドルー・バルフォアと共にEdinburgh Physic Gardenを築き、1681年にはRoyal College of Physicians in Edinburghを創建した。1685年、エディンバラ大学医学教授。
- 2) Archibald Pitcairne, 1652-1713. Royal College of Physiciansを卒業し、シッポルドの後継者としてTown's Collegeの医学教授。監督教会員(Episcopalian)として、ジャコバイト系の文化伝統の下で育った。ピトケアンは会員中に詩人の多いJacobite Clubを主宰したが、経緯についてはつまびらかでない。
- 3) Andrew Balfour, 1630-1694. 植物学者。注1)参照。
- 4) Charles Alston, 1683-1760. 1716年、Botanic Gardenの初代教授となる。
- 5) William McNab, 生没年不明。1810年、Botanic Gardenに着任して園の植物コレクションの充実に力を注ぐ。息子James (1810-1878)、孫William Ramsay(1844-1889)も共にBotanist。
- 6) 1770年代のエディンバラは医学の世界的中心地であったが、それ以前に既に、エディンバラ大学医学部には81人のアメリカからの医学留学生がいた。

#### 4. Cape Club (ケープ・クラブ)

継続期間：1764-1841

創設者：ジェームズ・エイトケン(James Aitken)

ケープ・クラブは、Poker(後出)や、詩人口バート・バーンズが加わっていたことで有名なCochallan Fencibles Clubなどと同じく、convivialな文芸クラブの一つである。そして、もっとも多様な社会階層のミックスしたクラブの典型と言われる。1764年、まずエディンバラに誕生し、1771年、グラースゴウに、その他ロンドン、マンチェスター、チャーチストン、米国の南カロライナ州等にあい次いで同系クラブが設立された。

エディンバラのクラブは、関連文献<sup>1)</sup>によって、エイトケンが創設者の一人であることが判明している。創立当時のメンバーは、エイトケンのほか、コウバーン(James Cockburn)、ランカシア(Thomas Lancashire、コメディアン)、Michael Bruce(詩人)、Alexander Clapperton、William Fleming、John Ross、Mungo Carrick、William Reidの9名であったと推定されている。1768年、エイトケンの提案で会

員各自が騎士の称号を冠することになり、Sir Speak(コウバーン)、Sir Silence(リード)、Sir Cape (ランカシア)などと名乗った。エイトケン自身は、Sir Pokerを自称した。

これらの詩人、文人たちのほか、靴屋、洋服屋、医者、鍛冶屋、石彫職人、理髪屋、酒造業、印刷業、海軍軍人等、会員の職業は多彩をきわめた。最初の10年間に会員数は2百名に達し、1800年までには650の騎士号を与えたと言われる。ケープ・クラブには際立って著名なりテラーティは少ないが、創設期メンバー以外の会員として、クラブの中心人物であったハード(David Herd)<sup>2)</sup>、画家ランシマン(Alexander Runciman)<sup>3)</sup>、カミング(James Cumming [or, Cummyng])<sup>4)</sup>、John Wotherspoon(印刷業、ハードの協力者)、詩人Robert Fergusonらがいる。ファーガスンが入会を認められたのは1772年10月10日、ケープ・クラブの桂冠詩人と謳われたが、主著 *Poems*, 1773 を残して翌年わずか24歳で夭折した。その詩はロバート・バーンズに深い影響を及ぼしている。

創設年について、文献によつては1733年説を探るものがあるが<sup>5)</sup>、これはグラント(James Grant)の思いちがいが後世に誤まり伝えられたものようである<sup>6)</sup>。グラントは *Edinburgh Herald* 紙上で、ケープ・クラブが1798年3月15日に65周年を迎えると報じられたのを読んで、単純に引算をして創設年を割り出したものらしいが、当時ケープ・クラブは、1766年から年に2回 Grand Cape (ケープ祭のようなもの)を実施し、それぞれが1周年祭とみなされていた<sup>7)</sup>。

〈注〉

- 1) ケープ・クラブ出席者名簿(1764-1787). National Library of Scotland, MS. 2004, cf. McElroy, p. 171. 私は、NLSでこの文献を探しあてることが出来なかつた。他にケープに関する関連文献として、Herd, David, *Songs from Herd's Manuscripts*, edited with introduction and notes by Hans Hecht. Edinburgh, 1904 がある。
- 2) David Herd, 1732-1810. 好古学者。スコットランド民謡の収集家。
- 3) Alexander Runciman, 1736-1785. アラン・ラムジイと同時代の風景画家。Gavin Hamiltonと共に長くローマに修業した。
- 4) James Cumming, 生没年不明。紋章画家。スコットランド紋章院の書記。のち Antiquarian Society の書記。カミングは1783-84年中、ケープ・クラブの“君主”格であった。
- 5) Daiches, David, Jones, Peter & Jean (eds.), *op. cit.* p. 36.
- 6) Grant, James, *Old and New Edinburgh, its history, its people and its places*. London, [1883].
- 7) McElroy, *op. cit.* p. 145.

## 5. Friday Club(フライデイ・クラブ)

- 参考文献 1. List of the members of the Friday Club. (Edinburgh, 1805) [NLS]  
2. Cockburn, Henry Thomas, *An account of the Friday Club*, written by Lord Cockburn, together with notes on certain other social clubs in Edinburgh, Edinburgh, 1910 (The Book of the old Edinburgh club, vol. 3 Ed. by Harry Archibald Cockburn) 初版は1908.

継続期間：1803-?

創設者：ウォルター・スコット(Sir Walter Scott)<sup>1)</sup>、Francis Jeffrey<sup>2)</sup>他4名

フライデイ・クラブは啓蒙期のもっとも著名な三つのコンヴィヴァル・クラブ—Poker, Oyster, Fridayの中では、前二者ほどに有名とは言えない。そして、その成立ももっとも遅く、啓蒙期の末期、ちょうど第2期のエディンバラ・リビュー(*Edinburgh Review*)<sup>3)</sup>の開始直前に、スコットが、ジェフリほか4名のメンバーと計らって創設したものである。その4名は、ジェフリと共に*Edinburgh Review*の創始者の一人であったシドニー・スミス(Sydney Smith, 1771-1845), (Hugh) Murray (1779-1846)<sup>4)</sup>, Allen(詳細不明), 及び常識哲学派のThomas Brown(1778-1820)であった。

会員の多くは、啓蒙期の著名な文人・学者であるステュアートや、ジョン・ミラー、ジョン・プレイフェア(John Playfair)<sup>5)</sup>らに育てられた啓蒙期第二世代(むしろ、第三世代か?)のリテラーティであって、全体としてウィッグ的傾向が強かった。旧世代もふくめて会員名を挙げれば、Sir James Hall [of Douglas] (1761-1832), ドゥーガルド・ステュアート(Dugald Stewart)<sup>6)</sup>, ジョン・プレイフェア, Sir Archibald Alison(1757-1839. 同名の息子1792-1867の可能性もある), William Erskine (1769-1822. 弁護士, ウォルター・スコットの友人), Henry Brougham<sup>7)</sup>, ホーネー(Francis Horner)<sup>8)</sup>, ヘンリー・マケンジー(Henry Mckenzie)<sup>9)</sup>, ヘンリー・コウバーン(Henry Thomas Cockburn, 1779-1854), Thomas Campbell<sup>10)</sup>らがある。コウバーンは、1827年にフライデイ・クラブの会史(参考文献2)を執筆した。又、Francis Jeffreyの伝記作者でもある<sup>11)</sup>。フライデイ・クラブの最後は、コウバーンの会史によっても定かではない。

〈注〉

1) Sir Walter Scott, 1771-1832. 周知の人物である。啓蒙時代末期のもっとも著名な詩人・作家・法律家。スコットやFriday Clubの時代を啓蒙期とみなさ

- ない研究者もいる。
- 2) Francis Jeffrey, 1773-1850. ドゥーガルド・ステュアートの弟子。シドニー・スミスと共に第2期の*Edinburgh Review*を創始、編集にあたった。
  - 3) *Edinburgh Review, or Critical Journal [etc.]* 第1期は、Jan./July, 1755-July 1755/Jan. 1756の2号のみで終刊となった。第一世代の活動場所となる。第2号に、アダム・スミスの書評と編集者あての書簡がある。第2期はVol. 1, No. 1 Oct. 1802/Jan. 1803-Vol. 250, July/Oct. 1929. 第1号をシドニー・スミスが編集し、フランシス・ジェフリは創刊から1829年まで引き続いで編集に関与した。第2期は、元来、1797年に創られて3年間続いたAcademy of Physicsという学生団体から発展した。雑誌の編集という形を借りて展開された最終段階の啓蒙運動と言えよう。
  - 4) Hugh Murrayと推定されるが、Murray of Simprimであるかもしれない。正確なところは判らない。
  - 5) John Playfair, 1748-1819. 数学者、地質学者。1790年当時、Royal Society of Edinburghの自然科学部門の書記を勤める。*Edinburgh Review*で、主として自然科学論に健筆をふるった(15年間に60の論文を執筆)。
  - 6) Dugald Stewart, 1753-1828. 常識哲学派の大立物である。トマス・リードの弟子で、1785年エディンバラ大学道德哲学教授に就任。第2期*Edinburgh Review*を舞台にして、啓蒙期教育論争の中心になる。弟子に、ヘンリ・ブルーム、フランシス・ジェフリ、フランシス・ホーナー、パーマーストン卿(Lord Palmerston)、ジョン・ラッセル(John Russell)ら。
  - 7) Henry Brougham, 1778-1868. ドゥーガルド・ステュアートの弟子。ジョジフ・ブラック(化学)の最後の頃の講義を聞いている。ちの大法官上院議長(Lord Chancellor)。啓蒙期人物の下限と言われる。
  - 8) Francis Horner, 1778-1817. ステュアートの弟子。マカラックと共に*Edinburgh Review*で経済学の論陣を張った。
  - 9) Henry McKenzie, 1745-1831. 雑誌*Lounger*と*Mirror*を創始、編集した(*Mirror Club*の項参照)。スコットランドの伝説的詩人Ossianに関する調査報告をまとめた。20. Royal Highland and Agricultural Society of Scotlandの参考文献15をみよ。
  - 10) Thomas Campbell, 1777-1844. グラースゴウに生れ、グラースゴウ大学に学ぶ。1826年、大学の名誉総長(Lord Rector)に選ばれ、27年、28年と三選される。処女作*The Pleasures of Hope*(1799)は同年中に4版を重ねた。バイロンは、この詩を英語で書かれたもっとも美しい啓蒙の詩であると讃えている。
  - 11) Cockburn, Henry Thomas, *Life of Lord Jeffrey with a selection from his correspondence*. 2 vols. Edinburgh, 1852.

6. Harveian SocietyについてはAesculapianを見よ。
7. Highland Society of Scotland, のちHighland and Agricultural Society of Scotland → Royal Highland and Agricultural Society of Scotland
8. Juridical Society(1797年Logical Societyと合併)

参考文献 1. Case proposed by W. Buchan. For the discussion of the Juridical Society upon Monday the 17th June 1780 (Case by Archibald Fletcher respondent Robert Bell. Edin., 1782) [NLS]

2. A collection of styles; or, A complete system of conveyancing, adapted to the present practice of Scotland, etc. 3 vols. Edinburgh, 1787–94. [NLS; EUL (v. 1 only)] 2nd ed. 3 vols. Edinburgh, 1811–28. [NLS] 4th ed. Vol. 12, Edinburgh, 1855. [NLS; EUL] 5th ed. 3 vols. Edinburgh, 1881–83 [NLS; EUL]
3. History of the Juridical Society of England. Ed. by William Reid. Edin., 1875. [NLS; EUL]
4. General list of members. Edinburgh, 1822. [EUL]
5. Law cases and speculative questions for the discussion of the Juridical Society ... 1822–24. Edinburgh, 1822–23. 1824/25–1842/43 (1830/31–31/32 lacking). [EUL]
6. Laws of the Juridical Society of Edinburgh. Edinburgh, 1797. Cameron collection. Also 1806 ed. [EUL]

継続期間：1773+(継続か?)

創設者：ジョン・ラッセル、Jr.(John Russell, Jr.)他11名

1695年にジョン・スピティスウッド(John Spottiswood)が、法律学徒に向かって私的な学会の設立を提唱したが、不発に終わった。それから78年後の1773年、Juridical Societyは12人<sup>1)</sup>の若い弁護士修習生<sup>2)</sup>によって創立され、第1回目の会合が2月27日土曜日に開かれた。

最初の数年間は、純粹に法律知識の習得のための専門的団体として推移した。彼らは毎週土曜日の早朝、エдинバラ大構内のスコットランド法教室で集会を持つか、市内のJohn's Coffee Houseという喫茶店あるいはその他二ヶ所の店のどこかに屯して、勉強会を続けた。会は大体二つの方法で運営された。一つはスコットランド法の正規のコースを継続的に勉学すること<sup>3)</sup>であり、いま一つは、折々の法律上の諸問題をとり上げて議論すること、すなわち、判例研究を中心と

する勉強会であった(参考文献1, 5を参照)。

やがて、会は別の事業をも試みるようになる。一つは法律図書館の創設である(この図書館は現在も存続している)。図書館の歴史は、1775年に彼らの勉強会のためにジョン・アースキン(John Erskine)のSmall Instituteを購入したことから始まった。他の一つの活動は、各種の司法文書の書式(the system of styles)を収集することであった。この活動は、最終的にはCollection of stylesの出版として結実し、会活動のもっとも重要な所産となった(参考文献2を参照)。

しかし、会活動をあまりに極端に、専門的関心のみに絞りこみ過ぎたためと、政治的討論、たとえばフランス革命についての論議などを厳禁したことが原因となって、会員の興味をつなぎ止められず、1796年頃までには会勢が漸減して行った。かくて、会の活性化をはかるべく、1797年、その25周年を記念して、ジュリディカルよりはやや間口の広い活動(法律と文学)を行なっていたLogical Society(1793年立)と合併し、活動の巾を政治、文学、道徳哲学の分野にも拡大することによって蘇生した。以後、会はJuridical Societyの名の下に継続することになる。

〈注〉

- 1 ) 創設時メンバー : John Russell, Jr., Alexander Nairne, Harie Guthrie, Jr., John Farquharson, John Lesley, John Buchan, Alexander Alison, Alexander Kidd, Phineas Hall, Thomas Macdonald, Charles Stewart, George Sinclair.
  - 2 ) Writers to the H.M. Signet. スコットランドの法廷外弁護士を言い、職能団体としてSociety of Writers to the H.M. Signetを組織している。先の12人はこの弁護士の修習性であった。他に、Advocateと称する上級弁護士(法廷弁護士)があり、Faculty of Advocateをつくっている。イングランドにおけるBarrister(法廷)とSolicitor(廷外)の関係に対応する。
  - 3 ) Erskine, John (1695–1768), *An institute of the law of Scotland*; in four books; in the order of Sir George Mackenzie's Institutions of that law. Edinburgh, 1773.
9. Medical Society of Edinburgh (エдинバラ医学会) 1742年 Philosophical Societyに吸収、1783年 Royal Society of Edinburghに発展。Philosophical SocietyとRoyal Societyをも見よ。
- 参考文献 1. Medical essays and observations. Rev. and published by a Society in Edinburgh (i.e. the Medical Society of Edinburgh). 5 vols. in 6. 1733–44. [SaUL; GUL; NLS; EUL (v. 4–5 only)] 2nd ed. 1737(?)–44. [EUL (v. 2–3, 5 only)]; 3rd ed, rev. & enl. 5 vols. 1747. [NLS; EUL (vol. 1, 3, 5 only)]; 4th ed, rev. & enl, 5 vols. 1752. [EUL]; 5th ed. 5

vols. 1771 [EUL]

2. Proposals for the regulation of a Society for improving arts and sciences and particularly natural knowledge. (Edinburgh, 1739). [NLS]
3. Essays and observations, physical and literary, Read before a society in Edinburgh & published by them. Vol. 1-3. Edinburgh, 1754-71. [Widener; NLS; GUL; SaUL; EUL] Second series of essays pub. by the Society. First series the name of the Society does not occur. EUL copy wrongly catalogued under the heading of Royal Medical Society. 2nd ed. 3 vols. 1770-71.
4. Calendar of Hume MSS. in the possession of the Royal Society of Edinburgh, edited by J.Y.T. Creig and Harold Beynon, etc. Edinburgh, 1932. [NLS]
5. Transactions of the Royal Society of Edinburgh, Vol. 1-5+ Edinburgh, 1788-1805+ スコットランド啓蒙関係としては vol. 1-5 が重要。[Widener; J.R; NLS; EUL; SaUL; Nagoya] Proceedings, Vol. 1, 1832+ [Widener; EUL]. Index to ... 1783-1888. Edinburgh, 1890. [Widener]. Transactions, The first four vols. are each in 3 sections: History of the society; Papers of the physical class; Papers of the literary class. The literary class ceased to appear after Vol. 4; the 'History' which appeared in v. 1-5 included the Proceedings for 1783-1803, after which the publication of Proceedings was suspended until Dec. 1832 when the Society began to issue an independent series entitled Proceedings.

継続期間：1731-1741

創設者：アリグザンダー・モンローー一世(Alexander Monro, *Primus*)<sup>1)</sup>

エディンバラ医学会は、1731年に、エディンバラ大学の初代解剖学・外科学教授であったアリグザンダー・モンローー一世によって、医学知識の改良を目指す会(Society for the Improvement of Medical Knowledgeの別名がある)として創設された。

会の主要な責務は、医学上の興味ある事例を集めて出版することであり、のちに10年の歳月を費やして、*Medical essays and observations...* 5巻が、モンローのほとんど独力による編集によって出版された(参考文献1参照)。この文献は、エディンバラの医学教育を裨益しただけでなく、ひろく、ヨーロッパ各国に迎え

## 遺 藁

られ、英語版5版、その他フランス語、オランダ語、ドイツ語で多くの版を重ねた。

1737年に、この会から分れてより広汎な関心を持つPhilosophical Societyが誕生した。しばらくの間二つの会は、並行して各自の活動を続けるが、1742年に合併して、以後Philosophical Societyの名の下に、自然系、人文系両分野の活動を営むことになる。Philosophical Societyは、1783年に、ジョージ三世の勅許状を戴き、王立学会として今日に至る。現在のエдинバラ学士院がそれである。

なお、この会は同名のMedical Society of Edinburgh, 1734-1778(1778年、Royal Medical Society of Edinburghに発展。後出)と混同されやすく、エдинバラ大学図書館でさえ、この会のPhilosophical時代の出版物を、誤ってRoyal Medical Societyの標目下に目録作成している(参考文献23参照)。本物のエдинバラ医学会に発展した方のMedical Societyは6人の医学生が始めた勉強会だった。

〈注〉

1) Alexander Monro, *Primus*, 1697-1767. Monro dynastyの初代。1720(or, 1719) *Primus*は、エディンバラ大解剖学・外科学教授。1758年*Secundus*がその後を継ぐ。Aesculapianの項参照。

10. Medical Society of Edinburgh, 1734(1737?)–1777. Royal Medical Society of Edinburghを見よ。

11. Mirror Club(ミラー・クラブ) 前身: Feast of Tabernacles

継続期間: 1770-1787(?)

創設者: ウィリアム・クレイグ(William Craig)

ミラー・クラブは、イングランドの*Spectator*を模したと言われる雑誌*Mirror*<sup>1)</sup>および*Lounger*<sup>2)</sup>の刊行によって知られている。両誌の編集と執筆にもあたったヘンリ・マケンジー(Friday Clubの項参照)は、Scottish Addisonと呼ばれた。

Feast of Tabernaclesという会は、ジョン・ラムジー(Ramsay, John, of Ochtertyre)の記録<sup>3)</sup>によれば、弁護士や文人を主な会員として1770年に出現した文芸クラブで、のちに検事総長(Lord Advocate)となったダンダス(Henry Dundas, 1742-1811)への、共通の友情によって結ばれていた。この、タバーナクルズからミラー・クラブが派生したことは、同じくラムジーの記述によって明らかであるが、その移行時期については明示されていない。

しかし、1774年から1782年にかけて、ダンダスがミドロジアン地区(Midlothian)選出の下院議員を務めており、あわせて1777年には、検事総長にも就任した

ことから、エдинバラに不在の日が多くなり、また、ヘンリ・マケンジーがクレイグ(1745-1813, Advocate)の誘いに乗って、タバーナクルズに入会した。それらの事実を考え合わせると、ミラー・クラブへの脱皮は1778年頃に行なわれたものと推定される。雑誌*Mirror*の創刊を最初に提案したのは、クレイグである。DNBの‘Craig’の項から該当部分を引用しよう。‘Craig along with other advocates was a member of a literary society called Tabernacle ... On the suggestion of Craig they ultimately resolved to start a periodical for the publication of the essays, upon which they changed the name of the society to the Mirror club the name given to the publication being *Mirror*.’

タバーナクルズ時代の会員で判明しているのは、Andrew Crosbie (d.1785. 弁護士)。他にArchibald Cockburn (生没年不詳。ヘンリー・ダンダスの義弟), John Maclaurin, Lord Dreghorn (1734-1796. 裁判官。数学者Colin Maclaurinの長子)らが会員であったらしいと推測されている。ミラー・クラブに転じて以後のある時期には、John Logan (1748-1788. 聖職者、詩人, Hugh Blairの弟子), プレア(Blair)<sup>4)</sup>, Alexander Abercromby (1745-1795. 弁護士、裁判官)らが会員であったとマケンジー自身が述べているし、雑誌*Mirror*の創刊号(January 23, 1779)が刊行された時点における会員は次のとおりであった。マケンジー(Henry Mackenzie), M'Leod Bannatyne (弁護士), ジョージ・ヒューム(George Home, 高等民事裁判所 [Court of Session] 書記), Robert Cullen (弁護士), クレイグ(William Craig), オウグルヴィ (George Ogilvie, 弁護士), Alexander Abercromby。

マケンジーと高等民裁書記のヒュームを除けば、全員弁護士である。この中ではマケンジーだけがプロの文筆家であったが、初号にはオウグルヴィを除くすべての会員が執筆した。当然ながらマケンジーの寄与率がもっとも高く、次いでクレイグが健闘した。*Mirror*は又、会員外の寄稿者として、Sir David Dalrymple, Lord Hailes(1726-1792), タイトラー(Alexander Fraser Tytler)<sup>5)</sup>, ジェームズ・ビーティ (Aberdeen, Philosophical Societyの項参照), ヒュームの甥のDavid Hume (1757-1838. エдинバラ大学、スコットランド法教授), William Strahan (1715-1785. 印刷業, 『国富論』の印刷所)らの大物を擁していた。

スコットランドに*Tatler*や*Spectator*を希求する動きは、1710年頃からいく度となく試みられたが、そのつど失敗に終わった。結局のところ、*Mirror*と*Lownger*が短命ではあったが、唯一の成功例であった。しかも、その成功的の主因は皮肉なことに、本国スコットランドではかならずしも評判が芳しくなかったにもかかわらず、イングランドで好評を以て迎えられたことにあった。わけても、マケンジーのエッセーが好評で、1780年*Mirror*が雑誌としての刊行を中止したのも、読者の強い要望に応えて、ロンドンやアメリカではあい次いでリプリントが刊行さ

れた。1813年までに少なくとも13版の英国版、および1817年以後に9版、1792-93年には初期米国版が刊行されている。

〈注〉

- 1) *Mirror*. Nos. 1-110, Jan. 23, 1779-May 27, 1780(Aug. 21-Dec. 7, 1779は休刊)
- 2) *Lounger*. Nos. 1-101, Feb. 5, 1785-Jan. 6, 1787.
- 3) Ramsay, John, of Ochtertyre, *Scotland and Scotsmen in the eighteenth century*, ed. by A. Allardyce, 2 v. Edinburgh & London, 1888.
- 4) Blairは、Hugh BlairかRobert Blairか不明。前者(1718-1800)はStevensonの弟子で1758年より没するまでHigh Churchの牧師。1762年、エディンバラ大修辞学・文学教授。彼の修辞学は次世紀のアメリカで大きな影響を残した。ヒューム、スミス、ファーガソン、カーライルと共にPoker Clubの会員。後者(1741-1811)はヘンリー・ダンダスの友人で、のちスコットランド高等法院長(Lord President of the College of Justice)。Mirror Clubには法曹関係者が多かったから、経歴から見れば、ロバート・ブレアである可能性が高い。
- 5) Alexander Fraser Tytler, Lord Woodhouselee, 1747-1813. 歴史家。エディンバラ大学、世界史(Universal history)教授。啓蒙期の著名な歴史学者の家系に生れ、父William Tytlerはクイーン・メアリの擁護論者、*Elements of general history*はじめ多くの著作がある。息子Patrick Fraser Tytlerは、ウォルター・スコットの友人。*History of Scotland*その他の著作がある。

12. Museum of Science and Art のち、Royal Scottish Museum

- 参考文献
1. A catalogue of a collection of plaques, medallions, vases, figures, &c. in coloured jasper and basalte: produced by Josiah Wedgwood ... at Etruria ... 1760-1795, the property of Arthur Sanderson ... exhibited at the Museum of Science and Art, Edinburgh. Edinburgh for private circulation, 1901. [NLS]
  2. Musical Festival, 1815, Edinburgh, 28th October, 1815. Minute of the Room Committee in regard to the duties of the stewards, etc. (And Programmes, etc.) Edinburgh, 1815. [EUL]

継続期間 : ca.1760 +

創設者 : 不明

18世紀のスコットランドは、改良、啓蒙精神の具現として多くの学協会、クラブの誕生を見たが、これと並行して他の多様な組織活動—たとえばあらゆる種類

## スコットランド啓蒙期の主要学協会、クラブについて

の博物館や植物園の開設、百科事典の編集出版、雑誌、評論誌の編刊などが盛んに行なわれた。

Walker's Museum (John Walkerに起因する)として知られる、エдинバラ大学の自然史博物館 (Natural History Museum of Edinburgh University) や、グラースゴウ大学の Hunterian Museum (後出)と同じく、王立スコットランド博物館もまた、18世紀にその起源を求めることができる。

13. **Newtonian Club**については **Philosophical Society of Edinburgh** を見よ。

14. **Oyster Club**（オイスター・クラブ）

参考文献 1. Sinclair, John, Jr. *Memoirs of the life and works of the late Right Honourable Sir John Sinclair.* 1837. pp. 41–42.

継続期間：1760年代-1790年以後

創設者：アダム・スミス (Adam Smith) 他 2 名

オイスター・クラブはPokerに次いで名高い、啓蒙最盛期のコンヴィヴィアルなクラブである。スミスにとって、もっともお気に入りの憩いの場であった。しかし、その輝やかしい名声にもかかわらず、由来については漠たるところが多い。ジョン・シンクレア (John Sinclair) の *Memoirs*<sup>1)</sup> のほか、いくつかの文献に私的な記述が散見されるが、公式記録は残っていない。創立が1760年代のある時期であったことは確かだが、委細は明らかではない (スミスが第3代バッклー公爵を伴ってのヨーロッパの旅から帰国するのが1766年11月、半年間ロンドンに滞在後、67年5月にはカーコウディの母の許に帰る。本格的にエдинバラのキャノンゲートに居を構えたのは10年後の1777年であった)。発会のイニシアティヴをとったのがだれであったかも明らかではないが、ジョン・プレイフェアによれば、創設期の会員はアダム・スミス、ハットン (James Hutton)<sup>2)</sup>、ブラック (Joseph Black, 1728-1799)<sup>3)</sup> の3人であったと言う。この3人の周辺に、啓蒙期第一世代及び後続世代の錚々たる学者、リテラーティが数多く集まった。中心メンバーのほとんどが同じ世代に属し、同じ時期に共に教育を受けた同期生のような間柄であった。彼らは「青春時代の共通の経験を懐かしみ、若い日の交友を甦らせる」ことを第一義としたために、あえて新入会員の勧誘を行なわなかつた。

当初、会合はエдинバラ市内、グラースマーケットのある宿場 (Stabler, 第2級の旅館で、inn や tavern よりも格が低い) で開かれたが、オイスターの名声が汎く知れわたるにつれ、入会希望者が殺到したので、これを避けるためしばしば河岸を変えて、会の平穏を保った。複数の資料からマッケルロイが合

成した名簿<sup>4)</sup>に、括弧内に補足を加えて再掲すると Robert Adam, 1728–1792, architect)<sup>5)</sup> / Dr. Joseph Black / Dr. Hugh Blair [Mirror Clubを見よ] / —— Bogle, Laird of Dalowie / John Clerk of Elden, naval tactician / Dr. William Cullen, 1710–1790<sup>6)</sup> / Lord Daer / Dr. Adam Ferguson (Belles Lettresを見よ) / Sir James Hall, geologist [Friday] / Dr. John Hope, Prof. of Botany (Belles Lettres) / Dr. James Hutton (1726–1797) / —— Macaulay / John M'Gowan, Clerk of the Signet / Henry Mackenzie (Friday, Mirrorを見よ) / John Playfair (同上) / Dr. William Robertson (Belles Lettres) / Adam Smith (1723–1790) / Dugald Stewart [Fridayを見よ] / Dr. Swediaur. *Visitors* Archibald Cochrane, 9th Earl of Dundonald (1479–1831) / —— Cort / Samuel Rogers (1763–1855)

会の終息の時期も明確ではない。前述のように、積極的に会員を補充して会の存続を図ろうとしなかったから、旧来の会員の老齢化とあい次ぐ死によって、いつとはなしに衰退の途を辿ったものであろう。その時期はシンクレアの記述からみて、スミスの死後いくばくもない1790年代のある年であったと推察される。‘The last meetings of the club, which did not long survive the doctor [Adam Smith]’<sup>7)</sup>

〈注〉

1) シンクレアの *Memoirs* は Sir John Sinclair, 1754–1835 の死を追悼して、息子シンクレアが書き残したもの。父シンクレアは、ジェームズ・アンダスン (James Anderson) と同じく、農業や産業の改良に一生を捧げた。King of Improvers と呼ばれ、ヨーロッパ13ヶ国の25の学協会、農業団体から名誉会員の表彰を受けた。代表的業績は、18世紀スコットランドに関する金字塔的な社会学調査と評価される、*The Statistical account of Scotland*. 21 v. 1791–99 の編集である。シンクレアは都市計画なども手がけたが、スコットランド北端の町、サーソの計画が有名である。*Memoirs* 中にオイスター・クラブに関する記述があり、会員名などが記されている。シンクレア自身はオイスターの会員ではなかったが、スミスを深く敬愛していた。息子シンクレアは次のように、オイスターとスミスに言及している。「死を間近に迎えたスミスはすでに、オイスター・クラブに自ら出向くことはなかったが、ある日、キャノンゲートの自宅 Pammure House にクラブの人々を招いて、夕食を共にしつつ、古くからの親しい友人たちと一時の歓談をしたのなんだ。しかし、かれがあまりよく知らない人びとが、これがかれを見るさいごの機会とおもって会話を参加したのでかれは自分が好奇心の対象になったことに苦痛を感じ、スミスは席をたって、さりげなく、「もっといい場所でいましょう」と言って親しい者たちへ今生の別れを告げた……」

- 2) James Hutton, 1726-1797. 地質学者。18世紀地質学の新理論を樹立(Wernerian Natural History Societyの項参照)。*Theory of the Earth* (1795)は代表作。化学者のジョージフ・ブラックとはいわゆる刎頸の友である。ブラック、カレンと共に啓蒙期最大の影響力を持った自然科学者の一人。
- 3) Joseph Black, 1728-1799. 化学者。ウィリアム・カレンの最大の弟子。グラースゴウ大学におけるカレンの化学と医学の講義を受講し、のち1752年、エディンバラに移って医学教育課程を卒えたが、この時の卒業論文、'Dissertatio medica inauguralis, de humore acido a cibis orto, et magnesia alba, 1754' が、のちに量子化学分析の基礎を開くものとなった。グラースゴウ大学の化学教授からエディンバラ大学の化学教授に転ずる(1766-1797)。ジェームズ・ワットの蒸気機関発明に大きな影響を与えた。
- 4) McElroy, *op. cit.*, p. 169.
- 5) Robert Adam, 1728-1792. 建築家。William, Robert, James, Johnのアダム4人兄弟の一人。建築家として有名、父 William も建築家。Robert と James がとくに有名。エディンバラ New Town の建設を始め、橋、道路、町や村の設計等、スコットランドの至るところに足跡を残した。
- 6) William Cullen, 1710-1790. 医学者かつ化学者。エディンバラ医学史上もっとも卓越した人物と言われ、それまでラテン語であった医学の講義を最初に英語で行なった。著書は *Essays on the cold* 一作のみであったが、講義がすぐれていることは並ぶものがなかったと言われる。1744年グラースゴウ大学医学部設立に尽力、のち化学に移る。1756年エディンバラ大学化学教授、同時に王立病院の臨床医。1766、エディンバラ大学医学教授。1773-75、Edinburgh College of Physicians の学長。
- 7) Sinclair, John, Jr., *Memoirs*, p. 41.

15. **Philosophical Society of Edinburgh.** 1783年 Royal Society of Edinburgh に発展。

Medical Society of Edinburgh(1731)と Royal Society をも見よ。

参考文献 1. Essays and observations, physical and literary : read before a society in Edinburgh & published by them. Vol. 1-3. Edinburgh, 1754-71. [Widener; NLS; GUL; SaUL; EUL] Second series of essays pub. by the Society. First series the name of the Society does not occur. EUL copy wrongly catalogued under the heading of Royal Medical Society. 2nd ed. 3 vols. 1770-71.

継続期間：1737-1783

## 遺 稿

創 設 者：コーリン・マクローリン(Colin McLaurin)<sup>1)</sup>の発議による

Philosophical Societyは、1783年にRoyal Societyに転ずることによって、今日まで存続し、Royal Highland and Agricultural Society(後出)と同様、後世に残るスコットランド啓蒙の遺産の一つとなった。その別名をSociety for Improving Natural KnowledgeおよびSociety for Improving Arts & Sciencesと称し、1737年に、数学学者マクローリンの示唆によってMedical Societyから分離設立された。マクローリン自身は、Rankenian(後出)で、Medical Societyの当会員ではなかった。当時、メディカル・ソサエティの内部にはすでに自然科学全般および人文学をふくむ、いわばランケニアン的な、広汎な関心が芽生えており、1735年頃にランケニアンの中心人物であったウォーレス(Robert Wallace)<sup>2)</sup>が、クラーク(Sir John Clerk)<sup>3)</sup>、コーリン、プラマー(Dr. Plummer, Prof. of Anatomy)らに加わって、Philosophical Societyの設立に協力したと、*Scots Magazine*に報じられている<sup>4)</sup>。この会の基本的な特徴は、のちにRoyal Societyの活動に結晶することになるが、スコットランド啓蒙の基調を象徴的にあらわすかのように、科学と哲学及び文学が幸福な結合をとげていることであった<sup>5)</sup>。しかし18世紀末にかけて、啓蒙の精神が衰微するのと軌を一にしてこの結合は解体し、やがて、諸科学の専門分化へと進んで行く。

初代会長はアバーダウア卿(Lord Aberdour)<sup>6)</sup>。副会長は2名でサー・ジョン・クラークと従兄のJohn Clerk博士、プラマーとマクローリンの二人が書記を務めた。Medical Societyに対するマクローリンの領域拡大案に基づいて、会員の約3分の1は哲学、医学などの専門職に携わらない各層の「さまざまな紳士」(Divers gentlemen)でなければならない、とされた。会員総数は42名、うち少なくとも24名が普通会員(ordinary member)、18名程度を特別会員(extraordinary member)と定めた。普通会員がいわゆる専門職にあたり、「自然、学術上の実験や発見を以て会に寄与し、会合で報告することと、会報に研究成果を印刷刊行すること」が求められた。1783年、Royal Societyに転ずるまでの、著名な専門会員をあげれば、\*Colin McLaurin, Joseph Black, David Hume, Adam Smith, James Hutton, William Cullen, Dugald Stewart, \*Robert Wallace, \*Alexander Boswell, \*John Pringle, \*Professor [John] Stevenson, Lord Kames, Alexander Monro, *primus*(\*印はRankenian Clubの会員でもあった人々)。

1742年に母体のMedical Societyを統合した後、1745年のジャコバイトの叛乱と、1746年のマクローリンの死によって、会は一つの転期を迎える。Medical Societyが*Medical essays*, 5巻を遺産として残したように、それより広汎な分野をカヴァーする活動を一つの大規模な出版物として集約する必要があった。この時期の再編成によって、1752年<sup>7)</sup>、会長にモートン伯爵<sup>8)</sup>を再選、副会長2名

に新たにケームズ卿(Henry Home, Lord Kames)<sup>9)</sup>とロバート・ウィット(Robert Whytt)<sup>10)</sup>を選出した。モートンの死後、1768年にはケームズ自身が会長に昇格したとみられる<sup>11)</sup>。さらに、ヒュームとアリグザンダー・モンロー一世<sup>12)</sup>の2名を書記として、かつ*Essays and observations*, 3巻(参考文献1)の編者として選んだのである。これ以後の会の発展はケームズ卿の精力的な活動と指導力及びヒュームの知性と親和力、卓抜な調停能力に俟つところが大きかった。

〈注〉

- 1) Colin McLaurin, 1696-1746. ニュートンを除けば、18世紀のもっとも傑出した数学者と言われる。11歳でグラースゴウ大学に入学〔もっとも、当時は、この年齢での大学入学は、とくに珍しいことではない〕、19歳でアバディン大学の数学教授、21歳で英國學士院会員となり、1725年、ニュートンの推举によってエдинバラ大学数学教授に就任する。
- 2) Robert Wallace, 1697-1771. スコットランド教会の牧師。モダレーツの中心人物の1人である。1746年にヒュームがエдинバラ大学道德哲学教授のポストを志向して不調に終わった時、教会関係者でヒュームを支持したのは、ウォーレスただ1人であった。主著 “*A dissertation on the numbers of mankind in Antient and Modern times and some remarks on Mr. Hume's Political discourse, intituled of the populousness of antient nations.* 1753” は、Philosophical Societyで読んだペーパーをまとめたもの。刊行をめぐって、すでに同じテーマで、ウォーレスとは相反する立場から*Political discourse* を発表していたヒュームとの間に、友情に溢れたやりとりがあった。
- 3) Sir John Clerk, of Penicuik, 1684-1755. 裁判官。18世紀前半の卓越した好古学者。後半を11代バハーン伯(David Stewart Erskine, 11th Earl of Buchan)が代表する(後出)。1750年当時 Baron of the Exchequer。
- 4) Wallace, George: *Memoirs of Dr. Wallace [i.e. Robert Wallace]. Scots Magazine*, Vol. 33, 1771. p. 341.
- 5) *Essays and Observations*(参考文献1), Vol. 1に付された序文中で、ヒュームはつぎのように述べている。‘all the sciences are remarked to have a close connection together: but none more than those of medicine and natural philosophy.’ 自然哲学という用語は、学問一般と言うほどの意味で使用されており、医学との結びつきが強調される。ヒュームはここではとくに科学と文学との結び付きについては言及していない。しかし、同じ序文中の別の箇所で、Philosophical Societyの目的にふれて ‘promoting of natural philosophy and literature ...’ と述べている。ヒュームが会の目的から確に除外したのは、神学・道徳及び政治学であった。

- 6) アバーダウアー卿はDNBその他には出てこない。初代会長アバーダウアー説のソースは、マッケルロイによれば、*Scots Magazine and Edinburgh Litterary Miscellany*, Vol. 66, pp. 421–422: Two original letters from Prof. Maclaurin to his friend Dr. Johnston ...である。一方、ウォーレスの*Memoirs*(注4)によると、p. 341rのPhilosophical Societyの創設に関連したパセージ中で、会長は、Morton伯と述べられている。「He [Robert Wallace] co-operated, about 1735, with that incomparable physician Dr. John Clerk, Mr. Maclaurin, ... and ... in forming at Edinburgh, under the auspices of his learned and Noble friend, the late Earl of Morton, a Philosophical Society.」 DNBのモートン伯の項での記述も、*Memoirs*とほぼ一致している(注8参照)。さらに、モスナーのヒューム伝(Mossner, Ernest Campbell, *Life of David Hume*. London, 1954)中に、「... Earl of Morton continued as president(1751年12月)」とあり、つまり、1751年以前から、モートンが会長であったらしいことを窺わせるのである。
- 7) Rebellionの前後、会の活動には長い沈滞期があった。そこで組織を再編成して活動再開するのだが、この年が1751年か52年かは明らかでない。モスナーはヒューム伝の中でヒュームとモンロー一世が書記に選ばれたのが1751年の12月であったと推定している。しかし、マッケルロイは、“1752年”とする文献が多いことを指摘した上で、もっとも信頼できるソースとして、ケームズが1752年12月26日付で、ウイリアム・カレンあてに発した書簡を探っている。ケームズは、“... Remember also to contribute to the Philosophical Society, (中略) now that I have got in a good measure the control of it”と書き送って、会の要職に就いたことを示唆している。いずれにしても、12月の第1火曜日が<sup>g</sup>Philosophical Societyの選挙日と定められていた。
- 8) James Douglas, 14th Earl of Morton, 1702–1768. 天文学者。1739年 Edinburgh Society for Improving Arts and Sciences (Philosophical Society の別名)の初代会長(DNB)。1733–63年の30年間、ロンドンの英國学士院(Royal Society of London)のフェローとして、天文学の論文を寄稿する。
- 9) Henry Home, Lord Kames, 1696–1782. スティア卿(1st Viscount Stair, James Dalrymple, 1619–95)及びG.マケンジー (Sir George MacKenzie, 1636–91)の流を承継する法律家。スコットランド啓蒙期の重要な人物の1人である。スマスやヒュームのような第一級の思想家とはみなされていないが、極めて行動力に富んだ、スケールの大きな人物で、スマス、ヒューム、ジョン・ミラー、ヒュー・ブレアなど多くの若い学者・文人にとって師父的な存在であった。知的生産のみならず、農業技術や土地改良にも意欲を持ち、自ら実践にとり組んだ。

- 10) Robert Whytt, 1714–1766. エディンバラ大学の薬理学教授(Theory of Medicine), Royal College of Physicians, Edinburghの学長。
- 11) McElroy, *op. cit.*, p. 37. 典拠は、ケームズ宛のベンジャミン・フランクリン書簡。
- 12) 1752年(モスナー説では51年)の再編成にあたって、通説では、アリグザンダー・モンロー二世が、ヒュームと共に書記に選ばれた、としている。マッケルロイはこれを全面的に否定し、一世に間違いないと断定した。その根拠は、1) モンロー二世(1733–1817)は、1752年当時19歳。エディンバラ大学医学生でヒュームの相手としては力量不足である。ヒュームはすでに41歳で、学者としての名声高く Advocate's Library\* の館長職にあった。モンロー一世ならば、年齢も55歳、何よりも Philosophical Society の母体である Medical Society を創った當人であり、*Medical essays*, 5巻の編集実績もある。ヒュームの相手として不足のない人物である。2) より決定的な根拠として、ニュージーランドのオタゴ大学医学部図書館(Medical School of the University of Otago)に、モンロー一世自伝の自筆原稿が保存されており、エディンバラ大学紀要の Vol. 17 に掲載された。これによると、モンロー一世は1759年まで Philosophical Society の書記を務め、同年、副会長に選出される。そして、モンロー二世が父に替わって書記職に就いている。モンロー二世は1755–58年にかけて、ライデンとベルリンでさらに医学の研修を続け、帰国後26歳で父の後を継いでエディンバラ大学の解剖学・外科学教授となった。同年、前述のように Philosophical の書記にも就任するが、*Essays* の第1巻はすでに1754年、2巻が1756年に刊行されており、最終巻が1771年。したがって、二世が関わったのは最終巻のみということになろう。

\*Advocate's Library は上級弁護士協会の図書館。G. マケンジー（注9参照）が1689年に設立した。のちにマケンジーのコレクションを中心として National Library of Scotland が生まれる。ヒュームは1752年に館長に就任したが、図書の購入をめぐって館員たちと対立したことが端緒となって、1757年に辞任する。ヒュームの前任者は Thomas Ruddiman, 後任を Adam · ファーガスンが勤めた。

## 16. Newtonian Club

創設は1778年。Philosophical Society の内部組織として、そのもっとも活動的なメンバーが集まって創った。多くはエディンバラ大学の教授たちで、会員数は20名と限定され、Philosophical Society の集会終了後ただちに、この会の集まりが開かれる慣行となっていた。1777年にケームズ卿が会長に選出され、Philosophical Society は会勢再建築の一つの方向として、Royal Society への転換を模索している時期であった。議事録が残っていない（と言うよりは、作らない

方針であった)ため、Newtonianの創設意図は明白ではないが、Royal Societyへの昇格運動の推進グループとして働いたとも推測できよう。王立学会昇格運動の起点がエдинバラ大学にあったという事実と、Newtonianに同大学教授が多かったということの間には、偶然とは言えない関連がありそうである。

主要会員は Andrew Duncan, Sr. (Aesculapian の項参照) / James Gregory (1753-1821. Aberdeen King's College の教授、のち、エдинバラ大学臨床医学教授 / Daniel Rutherford (1749-1819. 外科医、エдинバラ大学植物学教授) / D. Stewart (Friday, Oyster, Philosophical 参照) / James Russell (1754-1836. エディンバラ大学臨床外科学教授) / John Hope (Belles Lettres 参照、エディンバラ大学植物学教授) / John Gardiner (生没年不詳、エディンバラ在住の医者) / William Smellie (1740-1795. Newtonian の書記を務めた印刷業者、好古学者、法律家、哲学者で医者。Britannica 初版を編集、ロバート・バーンズの友人で、バーンズの Poems のエディンバラ版を印刷出版した。Friday の項をも参照)。

### 17. Poker Club (ポーカー・クラブ)

参考文献 1. 'List of the Poker Club, 1768' with note of sums paid by the members, etc., 1769. (Ms.) [NUL] A copy is given in the account of the Club in *Book of the Old Edinburgh Club*, Vol. iii, 1910. pp. 145-54. *Proc.*, Vol. vi, p. 182 (f. 28)

2. Minute book of the Poker Club of Scotland, 1777-84. (Ms.) [EUL]  
'The first page of this manuscript contains a list of members as at 26 January 1776, and further names occur on two succeeding pages, ...' (Alexander Carlyle) The volume was presented to Edinburgh University Library in 1854 by Sir Adam Ferguson, eldest son of the philosopher.
3. Notebook, containing minutes and lists of members of the Poker Club, 1776-84 (Ms.) [NLS] 'On f.1 is a list, in the hand of Alexander Carlyle, of the members in 1776. The volume also contains 'Notes from Boswell's Life of Johnson' (f. 39), Notes from minutes of St. Leonard's College - beginning 1710' (f. 42)'.
4. Carlyle, Alexander, *The Autobiography of Dr. Alexander Carlyle of Inveresk*, ed. by John Hill Burton. London & Edinburgh, 1910. pp. 439-41.

継続期間：1762-1784

創設者：アダム・ファーガスン (Adam Ferguson)

啓蒙期にエдинバラに生まれた三つのコンヴィヴィアル・クラブ——Poker, Oyster, Friday の中で、Pokerはもっともポピュラーなクラブである。1762年の創設にあたっては、アダム・ファーガソンが中心的な役割を果たした。ポーカー(火かき棒、突つるもの)という名称も、ファーガソンの着想によるものとされている(一説では、アダム・スミスが名付親)<sup>1)</sup>。

Poker Clubは単なる文芸クラブではなくて、明らかにスコットランド的な性格を有する会であった。すなわち、会史(参考文献2)を執筆したアリグザンダー・カーライル(Alexander Carlyle)<sup>2)</sup>によれば、クラブはスコットランド・ミリシア(Scottish Militia)<sup>3)</sup>計画を宣伝し、その創設に向けて愛国心を鼓舞する意図をもって組織された会であった。とはいって、Militia Clubのように旗幟鮮明な直接的戦斗集団としてではなく('not so directly or obviously offensive as that of Militia club ...')、文芸クラブの擬装の下に、ひそかに世論を「かき立てて」、客觀情勢を有利な方向に展開する役割を自らに課したのである。Pokerの意味するところは、無関係な第三者には謎めいていようとも、会員にとっては明瞭であった。かくて、ミリシア問題に対する態度は、啓蒙期の思想家たち各自が、労働の分業体制が次第に深く浸透してきた市民社会を、どのように理解しているかを示す踏絵ともなったのである。

会員の中心メンバーは、主としてSelect Society(後出)から移動してきた(というよりは、かけもちの)人々と、アリグザンダー・カーライルがGriskin Club(グラースゴウ、1756年創立)から引き連れてきた仲間たちであった。

Adam Ferguson, \*Alexander Carlyle, David Hume, Sir John Dalrymple (1726-1810. 4th Baronet of Cranstoun. 1784年頃Solicitor to the Board of Excise), Adam Smith, \*Hugh Blair, \*Joseph Black, John Jardine, John Robinson(エдинバラ大学自然哲学教授、1792年頃、Royal Society of Edinburghの書記), Henry Dundas, \*John Home (1722-1808. 悲劇*Douglas*の作者, Scottish Shakespeareと謳われる。*Douglas*の評価をめぐって、ヒュームを始めとする知識人たちはナショナリストイクな過剰反応を惹き起す), James Edgar, \*Fletcher Campbell(いずれも生没年不詳)。\*印は、1786年(or 1787)の最終会まで出席した人々<sup>4)</sup>。参考文献2の1776年1月26日付の名簿には43名が記入されている。

クラブは主として冬季、トマス・ニコルソン(Thomas Nicolson's), フォーチュン(Fortune)などエдинバラ市内のタバーンで、週1回夕食時に会合を開いた。毎回、2名の次週幹事がきめられ、理由なく欠席する者には罰金が課として、会合の飲食費全額の請求書が彼に送りつけられた。こうして、Poker Clubは20年以上の歳月を重ねた。数年の休止後、1786年か87年に、より若い世代を加えて再生を図ろうとしたが失敗に終わった。衰退の原因はOysterの場合と大同小異のようである<sup>5)</sup>。最後の会に新たに加わってきた人々は、タイトラーによれば、次の

人々であった<sup>6)</sup> : Lord Woodhouselee (Alexander Fraser Tytler), Dugald Stewart, Lord Daer, Dr. W. Greenfield, John Playfair, William Robertson, David Hume, the nephew, Lord Bannatyne, Patrick Brydone (1741-1818), George Home, William Craig, Henry Mackenzie, Robert Dundas, John Morthland, Dr. Rutherford, Henry Grieve, William Waite

〈注〉

- 1) 参考文献 2 は、エдинバラ大学図書館に保存されている、カーライル執筆によるPoker Club の名簿をふくむ議事録である。この序文に、同じくカーライル筆の、'Account of the club prefaced to the records from 1774-1784'と題する会の小史が付されている。マッケルロイは、この文献を記述のベースに使っているが、この中に次の二節があつて、会の名付親はアダム・ファー・ガスンとされている。'In the beginning of the year 1762 was instituted the famous club called the "Poker" ... Professor Adam Ferguson luckily suggested the name of Poker, which was perfectly intelligible to all the originators of the scheme, while it was an impenetrable mystery to everyone else.'
- 2) Alexander Carlyle, 1722-1805. Inveresk の牧師。モダレーツでエディンバラ・リテラーティの代表的人物の一人。Jupiter Carlyle と呼ばれ、Select Society やPoker Club の主要メンバーとして、多くの重要記録を残している。
- 3) 当時、民兵は、王の意思に支配されることの少ない、自由な国民軍として、自立的な近代国家の形成に資するものとみなされ、その創設に向けて盛んな運動が展開された。しかし、1757年のMilitia Actによって、イングランドにのみ民兵軍の創設が認められ、Scottish Militia は拒否された。
- 4) Cockburn, Henry Thomas (Friday Club の参考文献 2 )
- 5) Scott, Walter, *Prose works of Sir Walter Scott*. Edinburgh & London, 1835. Vol. 19, pp. 337-338.
- 6) Tytler, Alexander Fraser, Lord Woodhouselee, *Memoirs of the life and writings of the honourable Henry Home of Kames*, 2 vols. Edinburgh, 1807. この文献にRankenian Club の名簿(George Wallaceが提供したもの)のほか、Poker の名簿もつけ加えられている。Woodhouselee 自身が後期の会員であつたから。

#### 18. Rankenian Club (ランケニアン・クラブ)

- 参考文献 1. Scots Magazine, Vol. 33, 1771, pp. 340-344. Wallace, George, *Memoirs of Dr. Wallace* (i.e. Robert Wallace).
2. Woodhouselee, Alexander Fraser Tytler, Lord, *Memoirs of the*

life and writings of the honourable Henry Home of Kames. ... containing of sketches of the progress of literature and general improvement in Scotland during the greater part of the 18th century. 2 vols. Edinburgh, 1807. Appendix to Vol. 1, appendix No. 8, A list of the Members of the Rankenian Club, furnished by George Wallace, one of the last surviving members.

継続期間：1717<sup>1)</sup>–1774

創設者：中心人物：ロバート・ウォーレス (Robert Wallace)

啓蒙期のもっとも早い時期に誕生し、しかも長命なクラブであった。同時期に Ruddiman's Club と the Associated Critics が発会したが、いずれも短命に終わっている。Rankenian はまた、啓蒙精神をもっとも典型的に体现したクラブでもあった。Thomas Ruddiman<sup>2)</sup>の率いる Ruddiman's Club と Rankenian を対比して、マッケルロイは次のように述べているが、鋭く本質を衝いた発言と言えよう。'The Primary concern of Ruddiman's group and the Associated Critics drew their attention to Scotland's past, the Rankenian's to Scotland's future.'<sup>3)</sup>

ランケニアンという会名は、集会場所であったタヴァーンの亭主の名前— Thomas Ranken からとられている。ランケニアンの主たる目的は、ジョージ・ウォーレスが父ウォーレスの回想記(参考文献1)の中で述べているように、「自由な対話と合理的な追求によって相互に改良発展を図ること」<sup>4)</sup>であり、毎週前述のタヴァーンで、文学や哲学書の新刊をめぐって議論したり、英語の表現スタイルを磨いたりした。タイトラーが、ケームズ卿の回想録を執筆するにあたって、彼の求めに応じてジョージ・ウォーレスが提供した名簿<sup>5)</sup>によれば、会員は次の23名である。(通しNo.は原文のまま、括弧内は引用者)

1. William Wishart (d.1753. スコットランド教会の牧師、エдинバラ大学長。  
1744年、ヒュームのエディンバラ大学道德哲学教授就任に反対した。)
2. Archibald Murray (生没年不明。エディンバラ近傍の Murrayfield で弁護士)
3. Robert Wallace (Philosophical Society の項参照)
4. Isaac Madox (1697-1759. ウースターのカトリック教会監督 [Lord Bishop of Worcester])
5. John Horsley (1699-1777. ウェストミンスターのセント・マーチン教会牧師)
6. John Stevenson (エディンバラ大学論理学教授 [1730-75]) 弟子に Alexander Carlyle, Robert Clerk, William Robertson, Hugh Blair など)
7. George Turnbull (1698-1748. モダレーツの1人。アバディーン, Marischall

Collegeの道徳哲学教授。トマス・リードに影響を与えた。)

8. Colin Maclaurin(Philosophical Society 参照)
9. George Young(生没年不明。エディンバラの医者)
10. John Smibert(1684-1751. 肖像画家)
11. Charles MacKay(生没年不明。弁護士。エディンバラ大学政治史教授)
12. William Hepburn(生没年不明。アンガス(Angus) Inverkeilorの牧師)
13. Nichol Graham of Gartmore(同上。弁護士)
14. George Wishart(同上。エディンバラ、トロン教会の牧師。スコットランド教会の主任書記)
15. Alexander Dick of Prestonfield(1703-1785. 医者。Baronet)
16. Sir John Pringle(1707-1782. 医者. Baronet. エディンバラ大道徳哲学教授。国王の侍医で英国学士院長(Royal Society of London))
17. Charles Maitland of Pitrichie(生没年不明。弁護士。下院議員) \*Charles Maitland, 3rd Earl of Lauderdale (d.1691) の息子か? 5人の息子中に Charles という名前の人物がいる。
18. Alexander Boswell of Auchinleck(1706-1782. スコットランド民事裁判所判事)
19. Sir Andrew Mitchel[I] of Thainston(1708-1771. 外交官, 弁護士, 駐ベルリン大使)

以上がオリジナル・メンバーである。そして「クラブが40年以上存続したのち、会員が死亡したり、何時とはなく会から離れるなどの事情で出席者がかなり減少してきたため、創設会員の子息たちを入会勧誘しよう」ということになった。この決議の結果、次の各士gentlemenが会員に加えられた」とあって、次の4名が記録されている。

20. Thomas Young(生没年不明。ジョージ・ヤングの息、エディンバラ大学産婦人科教授。Thomas Young, 1773-1829. 医者の父か?)
21. George Wallace(d.1805?). ロバート・ウォーレスの息、弁護士)
22. John Maclaurin of Dreghorn(1734-1796. コーリン・マクローリンの息。スコットランド民事裁判所の判事)
23. Alexander Murray of Henderland(1736-1795. アーチボルド・マレーの息。スコットランド民事裁判所の判事)

ロバート・ウォーレスは、このクラブの存続を支えていた、もっとも重要な人物の一人であったが、その死後(1771年)3年にして、クラブは解散に至った。

'In the winter of 1771, a few months after the death of Dr. Wallace, the Rankenian Club resolved to discontinue their regular weekly meetings; and a few occasional meetings were afterwards held, down to the year 1774, from which time it ceased altogether.'<sup>6)</sup>

ランケニアンたちが、クラブを挙げてアイルランドの哲学者George Berkeleyと親交があったことは有名な話である。ヒュームは当時、エディンバラ大学の学生で、ランケニアンであり、かつ、バークリーと文通のあった彼の師を通じて(だれであったのかは不明)、バークリーの哲学に接触したらしく思われる<sup>7)</sup>。ヒューム自身がランケニアンであったことを立証する証拠資料の有無については、現在のところ私にとっては霧の中である。NLSの「スコットランド啓蒙期」展観目録<sup>8)</sup>中のランケニアン・クラブに関する解説は、「ヒュームが会員であった」としているが、典拠は示されていない。ランケニアンに関しては、ジョージ・ウォーレスの回想記と、タイトラーに与えた「名簿」とが、ほとんど唯一の信頼に足るソースであると思われるが、このいずれにも会員としてのヒュームの名前はみあたらない。「名簿」には日附が示されていないが、おそらく1774年の解散時直前か、父ウォーレスが死去した頃のもの(実質的には変化がないであろう)と推察される。かつての経過期に、ヒュームが入会した可能性が全くないわけではないとしても、それならば、ウォーレスの「回想記」にヒュームの名が触れられていないのは奇妙ではなかろうか。この短いメモアーノの中で、ウォーレスがヒュームに関して発言した唯一の箇所は、父ウォーレスが、かつて Philosophical Society で報告した論文を1753年に出版した折に、友人ヒュームの書に対する批評を併載した、と述べただりのみである。'The dissertation, which he [i.e. Robert Wallace] revised in 1747, was published at Edinburgh in 1753, together with an appendix, containing observations on a political discourse, published in 1752 by his friend Mr. Hume.'<sup>9)</sup>ヒュームのメンバーシップに関しては、マッケルロイも素通りであるし、チトニスも明確には述べていない。ただ、チトニスは前述のように、ヒュームがランケニアンであった師を通じて、バークリーの影響を受けた可能性についてのみ言及している。ともあれ、ランケニアン中の10名の会員で100冊以上の出版物(著作30、編集・出版2、翻訳3、説教35、パンフレット11、学位論文5、詩集2、戯曲1)を刊行して、この会は啓蒙時代の中核期を見事に生き抜いたのである。

〈注〉

1) Rankenian Club の創設年について、マッケルロイ、チトニスは共に1716年としているが、ジョージ・ウォーレスの「回想記」では1717年となっている。

'In 1717 a society, called "The Rankenian club," from the master of tavern at which it met, being instituted at Edinburgh, ...' (同書p. 340-r)。NLSの展観目

録でも1717年としている。

- 2) Thomas Ruddiman, 1674–1757. 印刷業。啓蒙期有数のラテン学者である。ジャコバンの伝統の強いAberdeenshireに生まれ、ナショナリストとしての気質が濃厚な人物。スコットランド文化をヨーロッパに広めるための手段として、ラテン語に国際言語機能を持たせようとした。一方で、スコットランド語にスコットランドのアイデンティティーを見出そうとした。ヒュームの前任者としてAdvocate's Libraryの館長を勤めている。
- 3) McElroy, *op. cit.*, p. 26.
- 4) 参考文献1は、父ロバート・ウォーレスに捧げる、息子ジョージの追悼録であるが、Rankenian Clubの公式記録がないため、クラブについてのものっともすぐれた解説であり、かつ唯一の信頼に足るソースと見なされている。
- 5) 参考文献2、Vol. 1のAppendix No. 8.
- 6) *Ibid.*, p. 52
- 7) Chitnis, Anand C., *The Scottish enlightenment – A social history*. London, 1976. pp. 197–198.
- 8) National Library of Scotland, *Scottish thought in the eighteenth century. An exhibition catalogue on the occasion of the week-end Conference on Scotland and the Enlightenment, 2–5 April 1970, held by the Institute for Advanced Studies in the Humanities of the University of Edinburgh*. Edinburgh, 1970.
- 9) Wallace, George, *op. cit.*, p. 343-r

19. Royal Botanic Garden Edinburgh. Botanical Gardenを見よ。

20. Royal Highland and Agricultural Society of Scotland

前身：Highland Society of ScotlandのちHighland and Agricultural Society of Scotland

- 参考文献1. An account of the cattle show and great agricultural meeting held at Glasgow, Sept. 1828, ... Drawn up by a member of the Western Committee. 1828. [EUL]
2. Index to the first, second and third series ... from 1799 to 1865 ... under the superintendence of F. N. Menzies. Edinburgh, 1869. [EUL]
3. Highland Society of Scotland, A letter by the landholders of Scotland, to the Highland Society of Scotland Feb. 1802.

Edinburgh, 1802. [NLS]

4. Letter to the founder of the Highland Society of Edinburgh. Edinburgh, 1784. [EUL]
5. [Anstie, John], A letter to the secretary of the Bath Agricultural Society, the subject of a premium, for the improvement of British Wool. Including observations on the report of the Highland Society, and Dr. Anderson's memorials. London, 1791. [Kress] Anderson's memorials are included in the appendix to the Highland Society's report on Shetland wool, 1790.
6. List of members of the Highland and Agricultural Society of Scotland at 31st Jan., 1837. Edin., 1837. ほかに数点. [NLS]
7. Premiums offered by the Highland Society of Scotland, for experiments with salt ... Edinburgh, 1818. [Kress] 'Paper on the uses of salt, for agricultural purposes. By the Right Hon. Sir John Sinclair, bart' pp. 2–16.
8. Premiums to be given by the Highland ... for 1817. Edinburgh, 1817. [Kress]
9. Premiums offered by the Highland Society of ... in 1821. (and 1824) Edinburgh, 1821–24. (1825, 1826, 1827, 1828, 1829). [EUL]
10. Prize-essays and transactions of ... To which is prefixed an account of the institution ... of the Society, by H. (i.e., Henry) MacKenzie. First series, Vol. 1–3. Edinburgh, 1799–1807. Vol. 4–6 wanting. [EUL]
11. Prize-essays and transactions. New series, Vol. 1–8, Edinburgh, 1829–43. Bound with vol. 3: Premiums offered by the Highland Society of Scotland for promoting agriculture and internal improvement in Scotland 1832. 56 p. ; 58 p. [EUL].
12. Proceedings of the Highland Society of Scotland regarding the military roads in North Britain. Edinburgh, 1814. [EUL]
13. Proposed regulations for the Highland Society of Edinburgh, Edinburgh, 1784. [EUL]
14. Report of the committee of the Highland ... to whom the subject of Shetland wool was referred, With an appendix, containing some papers drawn up by Sir John Sinclair and Dr. Anderson, in reference to the said report ... Edinburgh, 1790. [EUL; Kress; Yale] Bound with, Sinclair, John, Address to the Society for

Improvement of British Wool, Edinburgh, 1791.

15. Report of the committee of the Highland ..., appointed to inquire into the nature and authenticity of the poems of Ossian ... with a copius index containing some of the principal documents on which the report isfounded. Drawn up by H. MacKenzie, etc. Edinburgh, [Hitotsubashi, under Mackenzie; EUL]
16. Report of the committee of the Highland ... on the expediency of selling grain, etc., by weight. Edinburgh, 1812. [EUL]
17. Report of the committee appointed by the Highland ... to consider what is the best mode of forming institutions of the nature of savings banks, for receiving the deposits of labourers and others ... Edinburgh, 1815. [Kress]
18. Report of the Committe of the Highland Society of Scotland as to the causes which have obstructed the operation of the Small-Still Acts. n.p., 1822. [EUL]
19. Report of the committee of the Highland ... on the subject of fairs and markets, n.p., 1829. [EUL]
20. Royal warrant for a charter incorporating the Highland Society of Scotland at Edinburgh. Edinburgh, 1787. [EUL]
21. Seed corn. Suggestions offered by the Highland ... to its members, to country gentlemen, etc. Edinburgh, 1817. [EUL]
22. Unto the Right Hon., the Lords Commissioners of H.M. Treasury the Memorial of the Committee of Directors of the Highland Society of Scotland (relative to the improvement of wool.). Edinburgh, 1829. [EUL]
23. Aiton, Urilliam, A treatise on the origin, qualities, and cultivation of mossearth, with directions for converting it into manure. Published at the desire and under the patronage of the Highland Society. Glasgow, 1805. [Kress]; 2nd ed., Air, 1811. [EUL]
24. Wansey (1752?–1827), Wool encouraged without exportation; or, Practical observations on wool and the woollen manufacture. In two parts, Pt.1. Containing strictures on appendix no. IV to a report made by a committee of the Highland Society, on the subject of Shetland wool. Pt. II ... London, 1791. [Kress]
25. White, P., Observations upon the present state of the Scotch fisheries, and the improvement of the interior parts of the

## スコットランド啓蒙期の主要学協会、クラブについて

Highlands, Being an essay on these subjects, given in to the Highland Society of Scotland. Edinburgh, 1791. [Kress]

継続期間：1784–86 Highland Society. 1787 +

創設者：ハロルド・W・タムソン(Harold W. Thompson)

スコットランドの農業や産業の改良を目的として設立された多くの改良団体(Improvements Societies)の中、1800年までに創設された最後の、重要かつ、もっとも成功した協会である。ハイランドと呼ばれる貧困なスコットランド北部、及び西部高地方の農業改良団体として1784年に発足、1787年には王の勅許状(Royal charter)を下付されて、王立スコットランド・ハイランド地方農業協会となり、今日に至っている。

創設者はタムソン(生没年不詳)、ヘンリ・マケンジー(Friday及びMirror Club参照)がこれに加わった。他にディック(William Dick, 生没年不詳)、アンダスン(James Anderson)<sup>11</sup>らがある。*Prize essays and transactions, 1799* (参考文献10)の序文に設立の目的が次のように認められている。1782年のハイランド地方における農作物の不作は、農業技術改善が必要であることを示した。ハイランド地方のみならず、ロウランド地方にも、ひいては世界的にみても、科学的農業を樹立することによって、最高の現実的価値を生みだすことが出来るであろう。本会は、この目的を以て創設されたとして、この会の設置と活動が、カナダや北米の農業にも役立ったことを強調した。会のもう一つの目的として、「本会は又、ハイランド地方に固有の言語、詩文、及び音楽の保存にも適切な関心を払うものとする」と表明している。改良団体においてすら、啓蒙期固有の性格が表出されていると言うべきであろう。この目的に添った活動の例証として、Friday Clubの項でも触れたヘンリー・マケンジーの業績をあげることが出来る(参考文献15)。

この会は1790年に、世界でもっとも早く、エдинバラ大学の農業問題講座の開設を支援し、さらに、比較解剖学と獣医科の併設講座の設置を勧告して拒否されると、ウィリアム・ディックを援けてDick Veterinary Collegeを開校させた。のちに、これがRoyal Veterinary College of Edinburghとなった。

この会と類似の農業改良団体を、創設の早い順にあげてみると、

The Society of Improvers in the Knowledge of Agriculture 1723–1745(?) (後出)

Highland Society of Glasgow, 1727.

Highland Society of London, 1778.

Gaelic Club in Glasgow, 1780. 等がある。

このほか、短命ではあったが、農・産業奨励のみならず学術・文化全般の奨励団体として、より濃厚なスコットランド啓蒙的色彩をもつEdinburgh Society for the Encouragement of Arts, Sciences, Manufactures & Agriculture in Scotland(後出)がある。Improvement societiesは、政府や地方自治体関係機関等もふくめると、筆者の知る限りでも30以上が存在していた。

〈注〉

- 1) James Anderson, 1739–1808. J. シンクレアと並ぶ啓蒙期随一の改良運動家。18世紀スコットランド産業にもっとも精通した著者一人であり、アダム・スミスは、アンダスンを ‘a very diligent, laborious, honest man’ と評している。かれは雑誌 *The Bee* を編集主宰した。

21. Royal Medical Society of Edinburgh (王立エディンバラ医学会)

前身：Medical Society of Edinburgh, 1734 (1737?)–1777.

- 参考文献 1. Catalogue raisone; or, Classified arrangement of the books in the Library of the Medical Society of Edinburgh. Edinburgh, 1837. [NLS; EUL]
2. Dissertations. By eminent members of the Royal Medical Society. Edinburgh, 1892. [NLS; EUL]
3. Laws of the Medical Society of Edinburgh. Edinburgh, 1816. 1783 edition by William Smellie, Edinburgh; 1812 ed.; 1845 ed. [NLS]
4. Oration delivered before the members of the Royal Medical ... at the celebration of their centenary, February 17, 1837. By William B. Carpenter, etc. Edinburgh. [NLS]
5. Gray, James, *History of the Royal Medical Society 1737–1937*, ed. by Douglas Guthrie, 1952.
6. [Stroud, William], *History of the Medical Society of Edinburgh*, Prefaced to a “list of members, laws and library catalogue, of the Medical Society of Edinburgh Instituted 1737 Incorporated by Royal charter 1778.” 1820.

継続期間：1778 + (王立エディンバラ医学会となってから)

創設者：ジョージ・クレグホーン(George Cleghorn, 1716–89)他

Medical Society of Edinburghは、1778年に王の勅許状が下付されて、正式の

王立エдинバラ医学会に昇格した。母体のMedical Societyはエдинバラに二つ目に出た医学協会で、1734年、わずか6人の医学生<sup>1)</sup>によって始められた。1731年に生まれた最初の医学会が、専門の医学者によって創られながら、Philosophical Societyを経て、エдинバラ学士院に発展して行ったことは、既に述べた通りである。

6人の医学生たちは、隔週に仲間のだれかの下宿を会場にして集まった。最初のうち、彼らはもっぱらラテン語もしくは英語で、医学の学位論文を輪読していた。1735年には、クレグホーン1人を残して当初のメンバーは四散したが、翌年クレグホーンと、新たに参加したジョン・フォザージル(John Fothergill)の努力によって、1737年までには会員数は10名に復し、エдинバラ医学会の基礎はゆるぎないものとなった。

書物の勉強会だけではなく、実際の臨床例についてもさまざまに研究したり、議論を重ねる間に、いつしか収集した文献や資料が相当量に達した。そこで彼らは、会の固定した拠点となる建造物が欲しくなり、その中に図書室、会議室、実験室等も備え付けたいとの願望が強まったのである。

1763年、エдинバラ王立病院(Royal Infirmary)がこの会に会合場所を提供することになった。1771年からは建設資金の募金活動が始められ、1776年に念願の自前の建物が完成する。1779年には、Philosophical Societyも一時、月例会の開催場所として医学協会ビル内のホールを借用していたことがある。1778年12月14日にRoyal Charterが下付されて、王立エдинバラ医学会に転ずる。この時与って力のあった人々は、時の検事総長(Lord Advocate)ヘンリー・ダンダス(Mirror Clubの項参照)、メイトランド(James Maitland, 8th Earl of Lauderdale, 1759-1839)らであった。以後、エдинバラ医学会の特筆すべき活動として二つの事業があげられる。一つは1778年から1779年にかけての、医学学位論文の出版である。ウィリアム・スメリー(Philosophical Society, Newtonian Club参照)の責任編集の下に、Edinburgh Medical Schoolの1725-59年間の論文中のすぐれた就任・学位論文が選定され、*Thesaurus Medicus*として出版された。(後代のものがNLS, EULに1点あった。参考文献2)他の一つは、医学振興のための懸賞論文の募集で、1784年から開始され、毎回当選論文には20ギニー金貨(21ポンド相当)が贈られた。

会員中の著名人物としては、ウィリアム・カレン、アンドルー・ダンカン、フランシス・ホーム、ジョン・ホープ、ヘンリー・ブルーム(以上既出)、James Mackintosh(1765-1832)らがある。これらの著名な医学者たちの活動によって、当時エдинバラの医学研究・教育の水準は世界最高のレベルにあり、とくに、独立戦争の渦中にあった初期アメリカの医学や化学に及ぼした影響は、はかり知れないものがあった。わけてもウィリアム・カレンの医学は、早くからアメリカ

## 遺 稿

医学教育のカリキュラムに導入され(Botanic Garden, 注6), カレンはアメリカ医学の父であり, アメリカ化学の祖父であると讃えられた。エдинバラに留学中のアメリカ医学生の中には, このMedical Societyに加入する者も少なくなかったが, この中にJohn Moultrie (1747年加入), Peter Middleton (1747), Samuel Bard (1763), John Morgan (1762), Adam Kuhn (1766), Benjamin Rush (1767), Casper Wistar (1784)らがあった。彼らはそれぞれアメリカ医学界の草分けとして活躍したが,とりわけモーガン, ラッシュ, ウィスターは医学史上に大きな足跡を残した。

モーガンはカレンと親交のあったベンジャミン・フランクリンの紹介状を携えて渡英し, エдинバラでの修業成つて帰国後ただちに, フィラデルフィアに Medical Society を興した。また, 他の数人と共にペンシルヴェニア大学医学部 (University of Pennsylvania, Medical College) を創設し, 初代の内科学教授となつた。彼は又, American Philosophical Society の創設者の一人でもあったが, これは彼より数年遅れてエディンバラに渡ったベンジャミン・ラッシュが, フィラデルフィアの Medical Society 創設時にモーガンに書簡を送って, フィラデルフィアに文芸及び医学の双方を含む学会を設立する利点を説いた結果, その誕生を見たものであった。かくて, American Philosophical Society は明らかに, Philosophical Society of Edinburgh をモデルとして生まれた組織であったと言えよう。ラッシュは, 彼の時代のアメリカやスコットランドの事情についてすぐれた知見を含む日記, 書簡を数多く残しており, アメリカのボズウェルと呼ばれた。帰国後24歳でモーガンが創ったペンシルヴェニア大医学部の化学教授となり, モーガン没後はその後継者となった。彼はまた Rush Medical College of Philadelphia を創設, Institute of Medicine 教授, Royal Medical Society の名誉会員等を歴任した。アメリカ独立宣言署名者の一人でもある。ウィスターは1784年, エディンバラの医学会に加わったが, その翌年には会長の一人に選任されている。帰国後, ペンシルヴェニア大学解剖学教授を勤め, Wistar Institute of Philadelphia を創設した。

### 〈注〉

- 1)創設時6人の医学生は, George Cleghorn, William Cuming, Alexander Hamilton, James Kennedy, Alexander Russell, Archibald Taylor.

### 22. Royal Physical Society of Edinburgh (王立ディンバラ物理学会)

- 参考文献 1. Catalogue raisonné; or, Classified arrangement of the books in the Library of the Medical Society of Edinburgh. Edinburgh, 1837.  
[NLS; EUL]
2. Laws of the Medical Society of Edinburgh. Edinburgh, 1816. 1783

スコットランド啓蒙期の主要学協会、クラブについて

edition by William Smellie, Edinburgh; 1812 ed.; 1845 ed. [NLS].

創立：1788年、Royal Charter

王立ディンバラ物理学会については、調査が及んでいないため、解題を見送った。この時期に、農・産業技術改良と関連して、化学、繊維、鉄鋼等多くの科学・技術分野の学協会が発生するが、すべて今回の対象からは除外した。

23. Royal Scottish Museum. Museum of Science and Artを見よ。

24. Royal Society of Edinburgh (エディンバラ学士院)

前身：Philosophical Society of Edinburgh, 1737–1783 及び Medical Society of Edinburgh, 1731–1741 (Philosophical ... 及び Medical ... をも見よ)

- 参考文献
1. Calendar of Hume MSS. in the possession of the Royal Society of Edinburgh, edited by J.Y.T. Creig and Harold Beynon, etc. Edinburgh, 1932. [NLS]
  2. Transactions of the Royal Society of Edinburgh, Vol. 1–5+ Edinburgh, 1788–1805+ スコットランド啓蒙関係としては Vol. 1–5 が重要。[Widener; J.R; NLS; EUL; SaUL; Nagoya] Proceedings, Vol. 1, 1832+ [Widener; EUL]. Index to ... 1783–1888. Edinburgh, 1890. [Widener]. *Transactions*, The first four vols. are each in 3 sections: History of the society; Papers of the physical class; Papers of the literary class. The literary class ceased to appear after vol. 4; the 'History' which appeared in vol. 1–5 included the Proceedings for 1783–1803, after which the publication of *Proceedings* was suspended until Dec. 1832 when the Society began to issue an independent series entitled *Proceedings*.
  3. Shapin, Steven: The Royal Society of Edinburgh. A study of the social context of Hanoverian science. Ph.D. dissertation, University of Pennsylvania, 1971.
  4. Weld, Charles Richard: History of the Royal Society, with memoirs of the Presidents. London, 1848.

継続期間：1783+

創設者：ジョン・ウォーカー (John Walker)<sup>1)</sup>の発議による

1770年末から1780年代にかけて、スコットランドではいくつかの学協会に王の勅許状が与えられ、この会もロンドンのRoyal Societyと同等の意味における正式学会として、社会的認知を受けることになった。Royal Medical Society of Edinburgh(1778, 前出), Royal Society of Edinburgh(1783, 本項), Royal Society of Antiquaries of Scotland(1783, 後出), Royal Highland and Agricultural Society of Scotland(1787, 前出), Royal Physical Society of Edinburgh(1788)がそれである。

1783年3月29日にPhilosophical Societyに対して下付されたジョージ三世の勅許状は、Society of Antiquariesと拮抗して取得したものであった。この間の事情については‘Antiquaries’の項で述べる。1777年頃までPhilosophical Societyは会勢が冴えず落目であったが、同年ケイムズ卿が会長に就任する<sup>2)</sup>に及び、盛んなアイディアと積極的な行動力を駆使して、会の経営面にすぐれた力量を示した。

これ以前に、パリやベルリンの科学アカデミー、その他ヨーロッパ諸国のアカデミー、近くはロンドンの英国学士院(Royal Society of London)に倣って、スコットランドにおいても広汎な学術分野をカヴァーする王立学会が必要である、との認識がエдинバラの知識人の間に広まりつつあった。ウォーカーがこのアイディアの最初の提唱者であったと言われるが、実現に向けての端緒の動きは、エдинバラ大学の教授たちから起こってきた。彼らの大部分はPhilosophical Societyの会員でもあったので、教授たちの王への請願運動は、ただちに同会の動議可決するところとなった。ケイムズ卿のリーダシップの下に、運動の勢いが加速されたことは想像に難くない。やがて、11代バハーン伯によるScottish Antiquariesの創設と、それに引き続くAntiquaries陣営の王立学会昇格運動との絡み合いが、火に油を注ぐ結果となって、エдинバラ大学及びPhilosophical Societyの勅許請願活動は一気に燃え上がることになった。

エдинバラ学士院成立後、1783年6月23日の第1回会合で、Philosophical Societyの全会員は、そのまま学士院会員に移行することが決議された。会は、当時のエдинバラ大学長で、Royal Society推進派の代表格であったウィリアム・ロバートソンの勧告にしたがい、ヨーロッパ諸国のアカデミーに範をとって、学問・知識の全分野をカヴァーするものとし、これを二つの部門に分かった。一つは医学及び自然科学部門、他の一つは文学部門である。医学部門に数学、自然史、化学、薬学、自然哲学及び実用科学、工業技術・技芸の改良がふくまれた。文学部門には、文学、哲学、歴史学、思弁哲学、好古学が属した。そして、この二部門の研究成果発表のためのセクションと、他に会史に関するセクションを設けて3セクションとし、*Transactions*(参考文献2)を刊行する運びとなったのである。

しかし、文学部門は当初から活動が低調であったようである。あるいは、リジッドな学会形式による活動が、啓蒙知識人たちの自由な精神とは相容れなかつたのであろうか。1783年11月17日に第1回目の会合が開かれ、ヒュー・ブレア(Mirror,

Poker 参照), アイレイ・キャンベル(Ilay Campbell, 1734–1823. 弁護士, Lord President, Archibald Campbell の長男), ウィリアム・ロバートソン, エリコック卿(Lord Ellicock. 詳細不明)が初代の部会長に選任されたが、集会の参加人員も少なく、非公式の集まりのような雰囲気であったと伝えられている<sup>3)</sup>。文学部門は、結局、わずか15年ほど存続した末に消滅することになる。1800年までには、会報に占める Literary Section は機能を失い、これ以後エディンバラ学士院は、もっぱら自然科学分野のみの学会に転じた。

〈注〉

- 1) John Walker, 1731–1803. エディンバラ博物館の初代教授。1779年、ウイリアム・スメリーが志して不成功に終わったエディンバラ大学自然史教授のポストに就く。1792年当時, Royal Society の書記を務めた。
- 2) ケームズ卿は1768年に一度、モートン伯の没後、副会長から会長に昇格した(Philosophical Society の項参照)。引き続いて会長職にあったか否かは不明であるが、1777年の就任は再選であろうか。根拠は *Transactions I*(1788)pp. 6–7.
- 3) McElroy, *op. cit.*, p. 80. 1789年に Literary Section の部会に出席した Samuel Rogers の印象が次のように引用されている。“We [Adam Smith, Henry Mackenzie, James Hutton, and Rogers] went to the Royal Society. Only seven persons there. Dr. [James] Anderson read an essay on Debtors and the revisions of the laws that respect them, written by himself, very long and dull. Mr. Commissioner Smith fell asleep. Mackenzie touched my elbow and smiled.”

## 25. Select Society of Edinburgh

継続期間 : 1754–1764(or 1763?)<sup>1)</sup>

創設者 : アラン・ラムジイ二世(Allan Ramsay, 713–1784, the painter)<sup>2)</sup>

Select Society は、18世紀スコットランドの生んだ文学クラブの、もっともすぐれた典型の一つと言われている。創始は天分豊かな画家ラムジイの提唱によるものである。ラムジイはのちに、エディンバラを去ってロンドンに移り住み、ジョージ三世お抱えの宮廷画家になるのだが、エディンバラに住んでいる間の1754年5月、彼の親しい友人であるヒュームやスマスと、討論会創設計画について話し合ううちに、その願望が実を結んだのである。

5月22日水曜日、発会の集まりが開かれた。ラムジイ、ヒューム、スマスの3人のほか、この日出席したのは次の12人である。

John Jardine (1716–1766, エдинバラの牧師), Dr. Francis Hume (Homeか?既出), Mr. Anderson (James Andersonか?), Alexander Wedderburn (1st Baron Loughborough, 1733–1805. のちに大法官兼上院議長 Lord Chancellor, Simon Fraser(生没年不明。弁護士), James Burnett, Lord Monboddo<sup>3)</sup> (1714–1799. のち高等法院長 Lord of Session), John Campbell (弁護士。1708–1775のCampbellか?), Alexander Carlyle (Poker Club 参照), William Johnston (生没年不明。弁護士), James Stephenson Rogers (生没年不明。弁護士), John Swinton (d.1799. 弁護士), Alexander Stephenson (生没年不明)。

スコットランドの生んだ5人の重鎮, ヒューム, スミス, モンボド卿, ウェダバーン, そしてカーライルが会員中に存在したことによって, Select Societyの権威は比類のないものとなった。開会にあたって, スミスは会の目的を次のように述べている。「哲学上の諸問題を追求し, 会員の話技(art of speaking)を改良すること」。

当初の間, 彼らは毎週水曜日の夕, Advocate's Libraryを会場として顔を合わせた(1752年, ヒュームが館長に就任しているので, 場所の便宜をはかったものであろう)。しかし, 創設後1か月も経たない6月12日には会員数は倍増し, 翌55年2月までには83人に達していた。会場はほどなく, Laigh Council Houseの階上にある St. Gile's Masonic Hall に移された。新たに加わった68人のうちには, John Home, William Robertson, David Dalrymple, Gilbert Elliot, Hugh Blair, Patrick Lord Elibank, Alexander Dick, William Wilkie, Duke of Hamilton, そして, Lord Kamesのような有力な人々があった。これ以後も会員数は漸増についていに130人を数えるまでになり, そのうち50人を下らぬ人々がのちにDNBに掲げられるような著名人物であったという。1759年10月現在で, カーライルが作成した会員名簿<sup>4)</sup>から, さらに, 上記にふくまれない人物を捨うと, John & James Adam 兄弟(既出, 建築家), Robert Dundas(のち高等民事裁判所長 [Court of Session]), William Cullen, Adam Ferguson (いずれも既出), Lauderdale伯爵家の Errol, Aboyne, Selkirk, Roseberry & Cassils, George Drummond (1687–1766. エдинバラ市長)がいる。

集会時には, 事務的報告の後, 名簿順に当日の司会者を定め討論に入ったが, 討論テーマは会員中から提出された諸問題をプールしたリストの中から選び, 前回の集会時に公表する決まりになっていた。討論テーマはきわめて多様で, アバディーンの Philosophical Society や, グラースゴウの Literary Society (後出)のそれと類似の内容であった。マッケルロイは, Select Societyの関心がジョン・レーの述べるよう, 非常に経済(学)的であつた<sup>5)</sup>とする事実は認められないとして, レーは後述する Select Society の派生組織, 産業奨励会の議事内容と誤認したのではないかといふ。

Select Society から二つの部会が派生した。一つは、1755年2月12日の議決を承けて、ケームズ、エリバンク、ハミルトン、ウェダバーン、D.ダルリンブルら10人の検討委員会がつくられ、その結果生まれた産業奨励組織、Edinburgh Society for the Encouragement of Arts, Sciences, Manufactures, and Agriculture である。他の一つは、1761年に生まれた会、「スコットランド訛を美しい英語におきかえよう」というスローガンを掲げる Select Society for Promoting the Reading and Speaking of the English Language in Scotland であった。この二つの部会を、母体とまったく別の団体と見なすのは当を得ていない。むしろ、Select Society の哲学的、経済的、そして社会的なレベルにおける活動とみるべきものであろう。

Select Society は短命に終わった。二つの部会も共に、時を経ずして母体の後を追い、活動を停止した。通説によると、原因は言語改良部会のスコットランド訛追放運動が、スコットランド市民のナショナリズムを刺戟し、改良部会のみならず母体のSelect Society の信用をも失墜させ、解散に追いやつたのだとしている。あり得る推測ではあるが、文献的な確証は得られていない。この臆測はさておき、会員、とくに主要会員の中から、創設期の情熱が次第に失われていったプロセスは、記録を通じて明らかかなようである。1756年頃からすでにその兆しが見え、59年には動かし難い事実となっていた。1760年代の金融危機も深刻な作用を及ぼしたであろう。事実、財政難のため産業奨励会はメダルの数を減らざるを得なかつたし、言語改良部会も本格的な旗上げに至らず、挫折を見ている。しかし、三つの会がスコットランド社会の、知的あるいは工業的レベルにおける改良発展に寄与したものは、決して小さくはなかったであろう。

〈注〉

- 1) 終年の1764年について前掲議事録(参考文献)では、1763年2月8日の記録で終わっているが、マケルロイによれば、1764年終年となっている(McElroy, *op. cit.*, p. 110)。ソースは挙げられていない。
- 2) Allan Ramsay. 18世紀スコットランド最大の肖像画家。ヒューム、ハチスン、セント・クレア、モンロー一世、ルソーら、多くの同時代人の肖像を描いた。文筆家としても、数々の著作がある。父Allan Ramsay, 1686–1758は詩人で、1725年、イギリスで最初の巡回図書館のひとつを作った。
- 3) James Burnett, Lord Monboddoは精力絶倫、奇矯の人として知られる。エネルギーな点はケームズ卿と共に通しているが、啓蒙期知識人としての姿勢は、およそその逆で、全体として後向きである。古代ギリシャを愛し、近代をギリシャ時代から照射して、より劣ったものと批判した。第一作 *Of the origin and progress of language*. 6 v. 1773–92によって、人類学の先駆者と言われ

## 遺 稿

ている。

- 4) Stewart, Dugald, *Account of the life and writings of William Robertson ... and of Thomas Reid.* London & Edinburgh, 1801. Appendix として1759年10現在のSelect Society会員名簿が付されている。ステュアートの求めに応じて、アリグザンダー・カーライルが書き送ったもの。ロバートソンの著作集(Works, 1721-1793. 12 v.)の第12巻にも、伝記とこの名簿がおさめられている。名簿にはこのほか、スミス、ヒューム、ジョン・ホーム、D.ダルリンプル、ヒュー・ブレア、ジェームズ卿の名前が挙げられ、その他多数の弁護士、牧師、医者、7人の商人、4人の軍人となっている。カーライルのパートン版自伝(既出), p. 312にもSelect Societyに関する記述がある。
- 5) Rae, John, *Life of Adam Smith.* London, 1895, p. 110.

### 26. Select Society for Promoting the Reading and Speaking of the English Language in Scotland

参考文献 Regulations. Edinburgh, 1761. [EUL] 初出 *Scots Magazine*, XXIII, 1761, pp. 440-441.

継続期間：1761-1765

Select Society から派生した二つの部会の一つであり、目的はスコットランド人の言語改良、すなわち、「ブリティッシュ・イングリッシュを正しく読み、かつ話す能力を高める」ことにあった。話技の改良を目的の一つにもつSelect Society から、こうした部会が派生したのは当然の成行きである。

Select Society の外的条件としては、当時スコットランド社会は、学問・文化・産業のすべてにわたってイングランドに追いつけ、追い越せというステージにあったから、新しい文化創造のためには、どうしても土着言語を脱皮して、近代言語としての「イングリッシュ」になり換える必要があった。「しかししながら、言語問題に対する人々の姿勢は、大方が同じ方向を向いていたわけではない。社会階層によっても当然異なるし、知識人の間でも立場は輻輳していて、単純に二分することは出来ない。ヒュームやスミスは、当然、美しい英語で話し思考することが、スコットランドの未来を志向するものと考えていたが、トマス・ラディマンやその周辺の人々は、スコットランドの文化的ナショナリズムの立場から、スコットランド語によってスコットランドのアイデンティティーを証したいと欲した。思想的にはヒュームの対極にある常識哲学派の人々も、多くは言語改良に賛成であり、ヒュームの最大の敵対者ジェームズ・ビーティは、もっとも熱烈な改良論者であった。

改良の波に乗るもの、乗り損ねるもの、社会の表層部はまさに変革期の葛藤のただ中にあった。ボズウェルはこの時期の人々の右往左往を揶揄して次のように述べている。“It was better for a Scotsman and an Irishman to preserve so much of their native accent and not to be quite perfect in English, because it was unnatural.”<sup>1)</sup>しかしながら、底流の部分では、たとえば学校の初等教育過程で静かに変革が進み、スコットランド社会における英語の使用を確実に日常化しつつあったのである。Select Society内部的要因としては、まずラムジーがいた。ラムジーニー世は父ラムジーとは対照的な性格の人間であった。詩人の父が、野にある「磨かれざる玉」であったのに比し、息子ラムジーは万事にきわめて洗練されたタイプであったという。スコットランドとイタリーで、当時としては最高の教育を受け、最後はロンドンに住んで、宮廷画家になり、英國学士院の会員にもなった。スコットランド人嫌いで有名なサミュエル・ジョンソンでさえ、「ラムジーほどに気が利いて、豊富な知識に富み、しかも優雅な会話を交すことのできる人物は、ほかにはいない」と言って舌を巻いたという。ラムジーはまた、文筆家としても並み並みならぬ力量の持主であった。このラムジーが、最初に言語改良部会創設のアイディアを示して相談をもちかけたのは、ほかならぬヒュームとスミスである。ヒュームが、言語問題に強い関心を寄せていることは論を俟たない<sup>2)</sup>。この時期には*History of Great Britain*, 2 v. 1754-57が刊行され、流麗な英語のスタイルによって高い世評を得ていた。スミスの格調高い英語表現にはつとに定評があり、1759年の*Moral sentiments*によって、それはすでに立証されていた<sup>3)</sup>。

〈注〉

- 1) Boswell, James, *The ominous years*, ed. by Charles Ryskamp & others. London, 1963. p. 125.
- 2) ヒュームには*Scotticisms*, ca. 1752の著作がある。*Political discourses*, 1752に合本されている場合があるが、のち、*Philosophical works*, 4 v. 1826に収録された。
- 3) Considerations concerning the first formation of language, and the different genius of original and compounded languages. In *Philological miscellany* 1, 1761. スミスの言語問題に対する関心は、最初にこの短命の雑誌の論文に実った。のちに、この論文はタイトルを短縮して、*Moral sentiments*の3版以降に付された。スミスはエディンバラとグラースゴウ大学で、修辞学・文学の講義を行なっていて、後者の学生による講義ノートが残っている。

## 遺 稿

### 27. Society for the Encouragement of Arts, Sciences, Manufactures & Agriculture in Scotland

参考文献 1. Premiums by the Edinburgh Society for the year M,DCC,LVII. n.p.  
(1756?) [NLS]

2. Resolutions of the Select Society for the Encouragement of Arts, Sciences, Manufactures, and Agriculture. March 13, 1755. Edinburgh, 1755. [Widener; NLS]
3. Rules and orders ... (1755) [NLS]

継続期間：1755-1765

母体Select Societyの「改良精神」のうち、経済的関心から発した部会がこの会である。Select Society自身は、必ずしも経済的問題にのみ傾斜したわけではないことは、前述のとおりである。この新しい会の企画では、懸賞金を有効に配分することによって、工芸技術と産業の改良をはかるとした。すなわち、たとえば美術に対する賞金は名譽的なものにして、印刷術、製紙業、リネン工業などのような、より有用の工芸には多額の現金賞金をふり向けるなどの操作をするのである。

賞金の運用のため9人の常任幹事(ordinary managers)と、さらに9人の臨時の幹事が選出された。前者にLord Deskford, Lord Dalmenie, Sir Alexander Dick, Sir David Dalrymple, Mr. Alexander Monro, *Primus*, Dr. Robert Whytt, Mr. William Johnson, Mr. Alexander Wedderburn, George Clerk of Drumcrieff, 後者にDuke of Hamilton, Earl of Glasgow, Lord Elibank, Lord Kames, George Drummond(エディンバラ市長), Colonel Oughton, Mr. Andrew Pringle, Mr. Gilbert Elliot, Alexander Tait, さらに、商人Adam Fairholmが財務担当、廷外弁護士(Writer to the Signet)のPatrick Duffが書記に選任された。

こうして、母体Select Societyは、1755年3月12日に、この新しい会を母体とは別組織として運用することを決定した。同年4月7日に新会の最初の月例会が開催された。会の運営は順調で、1755年4月(もしくは5月)、Select Societyの財務を担当していたヒュームは、当時ローマに滞在中のラムジィ二世に次のように書き送っている。

“It has grown to be a national concern. Young and old, noble and ignoble, witty and dull, laity and clergy – all the world are ambitious of a place amongst us, and on each occasion we are as much solicited by candidates as if we were to choose a member of Parliament ...”

奨励金付きの懸賞は1755年の時点では決して新しい試みではなかったが、や

はりまだ珍しいことに属していた。1735年にイングランドで、1例、学術文化の奨励金が設けられたし、1754年にロンドンに工業の奨励団体として、Society of Encouragement of Arts, Manufactures, and Commerce(のちRoyal Society of Arts)が創設され、同様にプレミアムつきの懸賞を募集している。エディンバラにおける新協会の試みは大成功で、数年を経ずして懸賞金の数は当初の23から142個に増大したのである。Edinburgh Societyは財政を主として母体のSelect Societyに頼っていた。規則により、Select Societyの会員はすべてEdinburgh Societyの会員として登録され年会費を納入する義務があつたし、だれでも年間2ギニーの維持費を納入すればEdinburgh Societyの会員になることができたが、逆にそれによってSelect Societyの会員資格が得られるわけではなかった。

Edinburgh Societyも母体と同様に定期的に会合を開き、改良問題に関するさまざまのテーマを取り上げて議論している。Scots Magazineの1757年3月号にこの会の討論テーマ内容が掲載された。マッケルロイはこれを唯一の記録として11テーマ全部を紹介しているが(8ないし9問題までが農業問題であるが、それでも十分に、農業改良を足場としつつ資本主義的工業化に向けて、離陸しようとしている社会の姿をかい間見ることができる)、そのうちの4点を原文のまま再掲してみよう。

- ・ What are the advantages to the public and state from grazing? what from corn lands? And which ought to be most encouraged in this country?
- ・ What are the most proper measures for a gentleman to promote industry on his own estate?
- ・ What is the best method of getting public highways made, and repaired: whether by a turnpike, as in many places in G. Britain? by county or parish work? by a tax? or by what other method?
- ・ What is the best and most equal way of hiring and conducting servants? and, what is the Most proper method to abolish the practice of giving of vails? (vail = チップ、心附け)

Edinburgh Societyの議論は必ずしも議論のみで終わるわけではなく、社会慣習の変更や、行政的施策の促進など実践的效果を生む場合も少なくなかった。例えば従者や下婢に対する心附けの問題は、世論の俎上に上り、結局この慣習は廃止された。ハイウェーの問題についてはその後も幾度となく、ハイウェー・橋梁・フェリー建設法の制定に向けて論陣を張った結果、数年後には、スコットランドの道路はイングランドと同様に舗装され、道路交通事情は飛躍的な改良を見たのであった。協会は母体のSelect Societyより2年近く長く存続したが、やがて同種の性格の公的機関であるHonourable Board of Trustees for Manufactures in Scotlandに道を譲った。

28. Society for the Improvement of British Wool

- 参考文献 1. Observations on the different breeds of sheep and the state of sheep-farming in some of the principal counties of England. Drawn up from a report ... to Sir J. Sinclair, Chairman of the Society ... by Messrs. Redhead, Laing and Marshall, together with ... Remarks on the state of sheep-farming in the West Highlands (by K. Richardson). Description of a Cheviot sheep farm (by Sir J. Sinclair), etc. Edinburgh, 1792. [EUL]
2. Plan submitted to the public, by the Society for the Improvement of British Wool. Edinburgh, 1791. [EUL]
3. Society for the Improvement of British Wool. Edinburgh? 1790? Caption title: Includes observations on the advantages which the public may expect to derive, by means of the proposed association for the improvement of British wool. [Kress]
4. Sinclair, Sir John, Address to the Society for the improvement of British Wool; constituted at Edinburgh, on Monday, January 31, 1791. 2nd ed. London, 1791. [Kress]

1791年に創設され, John Sinclair がもっぱらこの会を舞台に活躍した。クレス・ライブラリーとエディンバラ大学図書館で数点の文献が見付かっているが、この会の詳細については調査が及んでいない。

29. Society of Antiquaries of Scotland. のち Royal Society of ... 別名 Society of Scottish Antiquaries

- 参考文献 1. Account of the Institution and progress of the Society of the Antiquaries of Scotland. By William Smellie, 2 pts. Edin., 1782–84. [GUL; EUL; SAUL; NLS]
2. Archaeologia Scotica: or, Transactions of the Society of Antiquaries of Scotland, Vol. 1–5. Edinburgh, 1792–1890. Vol. 1 & 2 were originally published without the title Archaeologia Scotica. Vol. 3 has an appendix containing an Account of the progress of the Society 1784–1830, list of members, donations, etc. [Widener; NLS]
3. Discourse delivered by the Earl of Buchan to the Society of the Antiquaries of Scotland on the 14th November, 1787, being the seventh anniversary of its institution. Edin., 1787. [NLS]

4. (Letter to the Lord Advocate of Scotland from the president and secretary of the society enclosing a memorial concerning the granting of a charter.) Edin. 1782. [NLS]
5. To the right honourable the Lord Advocate of Scotland. Memorial for the Society of Scottish Antiquaries (concerning the granting of a Charter to the Society). (Edin., 1783 ?) [NLS]
6. Transactions of ... Vol. 1-2. Edinburgh, 1792-1823. [EUL]

継続期間：1780- Royal Society, 1783 +

スコットランド文化の一般的な特質として、伝統的な懐古趣味や、古いものに対する熱烈な愛好心があげられる。しかし、啓蒙期エдинバラのリテラーティたちは、この種の好古主義には総じて熱意を抱かなかつた。彼らの関心は基本的に、スコットランドの未来に対して向けられていたからである。したがつて、Society of Antiquaries in London をモデルにした好古学会の創設を、第11代バハソ伯(David Stewart Erskine, 11th Earl of Buchan, 1742-1829)が口にし始めた時、エдинバラ・リテラーティ、とくに法律家たち、エдинバラ大学の教授達、Philosophical Society の会員、といった人々は、いちように、ある種の侮蔑をこめた敵対意識をもつて、これを迎え入れたのである。この空気は、バハソ伯の反啓蒙的姿勢によって、いやが上にも倍加された。バハソの方でもまた、リテラーティたちに対する反感と嫌悪の情を露骨に示した。リテラーティ対バハソを先頭とするアンティクリストたちの対立図式が出来上がったことについては、非はより多くバハソにあり、その例証にこと欠かないが、ここでは割愛する。創立プランが出来上がり、1780年11月の発会式には、リテラーティもふくめて37人の人々にバハソから招待状が送られた。うち、次の14人が出席したが、欠席した方にはヘンリ・アースキン、ケイムズ卿、ヘールズ卿(Sir John Dalrymple)、ヒュー・ブレアそしてジェームズ・ボズウェルがあった。Allan M'Connochie, William Tytler (Lord Woodhouselee, Alexander Fraser Tytler の父), Hugo Arnot (1749-1786), William Smellie, James Cumming, John Balfour, John Williams, John Syme, Andrew Crosbie (Poker Club, バートン版のカーライル自伝の中に、クロスビーの名前が見える), Charles Hay, Alexander Wight, William Creech (1745-1815. Printer, スメリーの共同経営者), Thomas Philips, John Donaldson.

会の活動が始まってからわずか2年後の1782年5月21日にバハソは王の許にRoyal Charterの請願文を発した(参考文献4, 5参照)。この「暴挙」がエдинバラ中に知れわたると、エdinバラ大学の教授たちを中心とするリテラーティは一斉に反撥を示し、かねてからの対立感情は頂点に達する。1782年12月、王の

下に3通の陳情文が送られ、好古協会に対して勅許状を下付しないようにと要求してきた。1通は、学長ウィリアム・ロバートソンの署名入りでエдинバラ大学から、2通目はPhilosophical Societyからで、ウィリアム・カレンの署名入りであった。残る1通はAdvocate Libraryの館員たち(curators)からの反対であった。この時、バハンは「彼らは三つの餌を持っているように見えるが、じつさいには一つだ」と言って、この反撃がエдинバラ・リテラーティの総体から発されたものであるとの認識を示した。

エдинバラ大学の反対理由は—そして後の二者もこれに従ったのだが—「好古協会にチャーターを下付することは、大学の既得権益を侵害することになる。大学側としては、学問・文化のすべての領域にわたる広汎な学術組織がより好ましいと考えている」と言って、ここに初めてRoyal Society of Edinburghの構想を表明する。バハン側も負けじと、鋭い皮肉をこめて一矢を酬いた。「好古協会はエдинバラに2年も存在しているが、Royal Societyのような素晴らしい構想があるのをついぞ知らなかった。もしかして、好古協会への反対運動にもっともらしい色付けをするために、一部の人たちが急造したプランではないのか」といい、次のようにも言って、大学側の痛い所を衝いてきた。「好古協会は好・考古学や自然史を専門とする会だから、Royal Societyの部門に加えて計画を補完しては如何か?」と。ジョージ三世が、この争いに裁断を下したのは翌1783年3月29日、同日附を以て双方にRoyal Charterを与えたのであった。闘い終わって漁夫の利を得たのは、果たしてPhilosophical Societyであったのか、Antiquariesであったのか? あるいは、双方であったのかもしれない。評判の芳しくないAntiquariesではあったが、業績は相当なものである。協会の出版物は数多く、分けてもその企画の中に、ジョン・シンクレアの、かのすぐれた業績、*Statistical account of Scotland, 21 v.* (William Creech, 1791-99)の続編として、新しい統計調査の編集出版(*The New statistical account of Scotland. Edinburgh & London, 1845. 15 v.*)への協力がふくまれていたことは、やはり特筆に値するものであろう。

### 30. [Honourable] Society of Improvers in the Knowledge of Agriculture (農業知識改良者協会)

参考文献 1. *Begin. A great number of the nobility and gentry having come to a resolution to encourage the wearing of home made linen cloth, the Honourable Society for improving in the Knowledge of Agriculture have advised the publishing of the following rules for propagation and dressing of lint and hemp, and for bleaching and whitening of linnen cloth. Edinburgh, 1726. [NLS]*

2. *Select transactions of the Honourable Society of improvers in the*

Knowledge of Agriculture in Scotland, Directing the husbandry of the different soils for the most prontable purposes, and containing other directions, receipts and descriptions. Together with an account of the Society's endeavours to promote our manufactures, Edinburgh, 1743. (By Robert Maxwell) [Kress; NLS]

3. A treatise concerning the manner of fallowing of ground, raising of grassseeds, and training of lint and hemp, for the increase and improvement of the linnen-manufactories in Scotland. Published for ... by the honourable Society for improving in the Knowledge of Agriculture ..., Edinburgh, 1724. (By Thomas Hope) [Kress; NLS entry under title, and the Author presumed to be Richard Bradley] This work has also been attributed to Robert Maxwell, Richard Bradley, and William Mackintosh.

継続期間：1723–1745(?)

創設者：アソール侯爵(Duke of Athole)

農業知識改良者協会は、大ブリテン島全体を通してもっとも早く設置された農業団体である。農業改良にもっとも成功した団体でもあり、以後創設された多くの改良団体のモデルとなった。1723年6月8日、アソール公爵の発意で創設された。創設メンバーは、Duke of Hamilton, Earl of Stair, Earl of Hopeton, Earl of llay, Lord Cathcart, Sir John Dalrymple, Mr. Hope of Rankeilor [Thomas Hope] で、トマス・ホープは生涯、土地改良に一方ならぬ力を傾け、Hope of Rankeilor と言われたが、詩人のAllan Ramsay (Select Societyを創った画家ラムジイの父) が、この新生協会に捧げる詩を作り、ホープを讃えている。当時ホープはエディンバラ市からストレイトン湖(Straiton's Loch)を賃借して干拓し、「かつて沼沢地であった処を…鍛を作り、樹木を植えて、肥沃な牧草地と心地よい逍遙の地となし、紳士淑女の憩の場」としたのである。

20年後に、Robert Maxwellが、改良者協会の*Select transactions* (参考文献2) の刊行準備を始める頃には協会員数は300名を数えるほどになった。名簿中には1707年のUnion条約締結にあたって委員を命ぜられた者が8名もいたし、公爵が3人、侯爵2人、伯爵21人、子爵1、卿23、ナイト爵45、民事裁判所長2 (Lord Presidents of the Session), 高等法院書記1 (Lord Justice Clerk), 民事裁判所主任書記4 (Principal Clerks of Session), 大蔵卿2 (Barons of the Exchequer), 高等法院評議員11 (Senators of the College of Justice), エディンバラ市長(経験者)3, といった具合に延々と続いて最後に上級弁護士50人、廷外弁護士10人、医学

博士7人、書店主2人、商人3人、園丁3人、技師1などとなっている。職人や技術者は実務的な助言の提供と引き換えに自由加入を認められていた。改良者協会の人々は、たちまち農業改良の技術を発展させ、やがてスコットランド中を改良熱が席巻したが、品種改良、生産性向上等、さまざまなメリットをもたらす一方で、インフレを招き借地料の高騰によって借地農の窮屈化が進んだ。

協会の活動は農業改良に留まらず、工業の奨励とも深く結び付いて行った。1726年、スコットランド政府に工業化に関する政策提言を行ない、27年には、スコットランド議会は関連二法案を可決した。一つはリネンと麻繊維工業の制限緩和、他の一つは水産業、製造業の奨励及び促進およびその他の改良事業に関する法案であった。後者に関わるものとして同年、イギリス政府によるBoard of Trustees for Encouraging Fisheries and other lmprovements in Scotlandが創設された。

改良者協会は1745年のジャコバイトの叛乱がきっかけとなって活動を停止するが、この会の存在を契機として、爾後スコットランド社会のすべての分野にわたって改良ムードが高まり、啓蒙盛期への途を切り開いたと言えよう。

### 31. Speculative Society

- 参考文献
1. Business of the Speculating Society, with a list of the members for the session, 1820–21; 1821–22; 1822–23, Edinburgh, 1820–22. [EUL Cameron Collection]
  2. General list of the members, etc. Edinburgh, 1814. [EUL Cameron Collection]
  3. History of the Speculative Society of Edinburgh from its institution in 1764. Edinburgh, 1845. [EUL]
  4. Laws of the Speculative Society of Edinburgh, instituted Nov. 1764, for ... provement in literary composition and public speaking. Edinburgh, 1818. Laws of the Speculating Society, instituted ... 1816. Edinburgh, 1820. [EUL Cameron Collection]
  5. Woodhouselee, Alexander Fraser Tytler, Lord, Discourse on truth, read by ... 1772. (On the benefits and disadvantages of a Militia Force. MS.) [EUL]
  6. Speculative Society, card of membership of (1770) [NLS MS. 3942, f.105] In NLS catalogue of MSS. Vol. 2, in a group of family papers (MS. Nos. 3942–88) titled Robertson-Macdonald papers, among the letters of the Robertsons (MS. 3942–4), there is included as of (f. 105, 3942, 1745–76, i + 306 ff) (MS) In MS. 2116, CH (Charters

and other formal documents) is included Ticket of membership of the Speculative Society given to David Cathcart, 1818. [NLS]

7. [Dickson, William Kirk], *History of the Speculative Society* 1764–1904. Edinburgh, 1905.

他に200周年記念に出版された文献(1964–68年頃)がある。

継続期間：1764+

創設者：ウィリアム・クリーチ(William Creech, 1745–1815, printer)以下6名

啓蒙期に起源を持ち、その後王立学会となって現在まで存続している会については、既にいくつか見てきたが、この会のように、私設の協会としてなお今日まで命脈を保っているのは、稀有の事に属する。1764年、エディンバラ大学の6人の若い学生たちによって始められた。入会者の多くは18歳から21歳くらいの若ものたちであったが、発会後ほどなく学生の会であることを中止した。以後、二百数十年の星霜を生き延びて ‘the Old College of the University’ と呼ばれる建物の一角に存在している。この場所は、かつて1769年にエディンバラ市議会の許可を得て、彼らの元祖会員たちが最初の建物を建設した発祥の地である。当時の金額で164ポンドを要したと言う。創設期の会員は、William Creech (1745–1815, printer), Allan Maconochie のち Lord Meadowbank, Alexander Belsches, John Bruce, John Bonar (会の書記)及びJohn Mackenzie。彼らは毎週金曜日(のちに水曜日)の夕方、ヤング博士(John Youngか)の教室で、まず講義を聴き、次いで討論を行なった。

この会の、他の啓蒙期学協会と異なる際立った特徴は、当初から何項目かの厳しい規定を立て厳密に会活動を律したことである。それらの項目とは、1. 会員数は15名と制限され、拡張主義を排した。2. 会の目的は文学と公的な場における演説法の二点にしほられた。3. 入会は抽選で定められる。4. 義務の強制的遵守、および5. 規律違反者は容赦なく退会処分に付すること、であった。結果は、協会の人気は上昇気流に乗り、専用の建物が出来上がったことから生ずる利点と相まって、その地位を不動のものとした。しかし当然のことながら、長期間には退潮期もあり、さまざまな原因から来る危機的状況もあった。1760年代の金融危機、フランス革命期には政治的議論を会内に持ち込むことを禁止したため、若い会員間に不人気をもたらした。1794年12月にはこの問題に関する検討委員会が出来、協会に対して会は当面の危機にあたって、討論テーマとして今日の政治的諸問題を取り上げることを許可すべく配慮されたいと勧告している。革命的気分の高まりの中で、若い会員間には一触即発の兆しが充満しており、それが会の基礎を搖がせて破滅に至らせない保証はなかった。この危機は、Speculative

Societyの会史上、もっとも輝やかしい時期に訪れたのである。この時期、会は、啓蒙後期の逸材のほとんどすべてを捲き込んでいた。すなわち、Francis Jeffrey, Henry Brougham, Francis Horner, John Archibald, Charles Kinnaird, James Moncreiff, Henry Cockburn, Henry Pettyのち3rd Marquis of Lansdowne(25歳で大蔵大臣になった)、そして、Walter Scottが会の書記を務めていた。ジェフリ、ブルーム、ホーナー、キネアード、ペティ、モンクレイフら、若手会員の大部分は政治的にはウィッグである。そして争いは、これら若いウィッグ会員と、古くからの会員でトーリーの支持者であるデヴィッド・ヒューム(哲学者ヒュームの甥、エдинバラ大学スコットランド法教授)、Charles Hope, Alexander Maconochie(創設会員Allan Maconochieの息子、第二代メドーバンク卿)らとの間に起こった。ヒュームは若いウィッグたちの姦ましい革命論義に腹を立て、彼らとフランスの革命家たちを結び付けて公けに論難した。ヒュームはひそかに彼ら若手会員たちの大学と会の双方からの追放を目論んだのだが、同僚たちがこの企てに乗ってこなかつたため、この計画は未然に終わった。一方、若者たちはジェフリを先頭に立ててヒュームの挑戦に応ずる構えであった。学長ウィリアム・ロバートソンが、ジェフリを喚問しで事情聴取しようとした時、彼は不在、ホーナーとキネアードは病気を口実に逃げ、結局ブルームが一人で出向いた。しかし、ロバートソンはブルームの大叔父にあたり、ブルームもひたすら「恭順」の姿勢に終始したため、この件は事なきを得たのであった。

だが、二度目のトーリー対ウィッグの抗争はそうすんなりとは納まらなかったのである。マコノキーが会に入っているのは会の行動を大学側に通報するスパイ活動をやっているからだとの噂が、ウィッグ側の耳に入り、この風評をもとに告発を受けたマコノキーは居直って、かえって問題を増幅させたのである。彼は彼らがこれ以上政治問題に首を突っこむのを止めないとならば、この夜の討論(1799年1月22日)を一言残らず記録した上で総会の召集を要求する。こういう議論を放置すると、大学の壇の中にジャコバン・クラブのような政治団体ができるかもしれないから、協会の自治権を返上して大学側に決着をつけてもらうよう、総会で検討しようではないかと言つて脅しにかかった。ブルームらは、マコノキーは協会の名譽を著しく毀損した、協会員としての品性に憤るような、臆説に基づく行動を公言してはばからないと、激しく非難した。長期間にわたつて猛烈な応酬が続いた後、ブルームらの決議が採択された。だが、その後に恐ろしい反動がやってきたのである。とてつもなく危険な組織(ジャコバン・クラブ)と関わりあいになることを怖れて、雪崩を打つような大量の脱会者が出了のである。Speculativeの命運まさに尽きたかのような大きな危機であった。

Speculative Societyを讃える言葉が多い。Speculativeは疑いもなく、18世紀を通じてもっとも人口に膾炙し、成功した討論クラブ(debating society)であった。

32. Wernerian Natural History Society (ヴェナー自然史協会)

- 参考文献 1. *Attitudes of the Principal Snow Peaks visible from Kumaon reported at the Nov. 23, 1816 meeting of the Society.* London, 1817.  
*Annals of Philosophy*, Vol. 9, 1817. pp. 231–234. [NLS]
2. *Memoirs of the ... for the years ...* Vol. 1–8, pt. 1; 1808–38. 8 vols.  
Edinburgh, 1811–1839. [EUL; NLS (lacks vol. 8, 1838)]
3. Sweet, Jessie M., *The Wernerian Natural History Society in Edinburgh. Freiburger Forschungshefte*, Nr. 223, 1967.

継続期間：1808–1838

創設者：ロバート・ジェイムソン(Robert Jameson, 1774–1854)

Wernerian Natural History Societyは1808年、ジェイムソンによって創立された、啓蒙期最後の専門学会である。ジェイムソンは、ジョン・ウォーカーの後を承けて1804年に、エдинバラ大学のNatural History Museumの館長兼教授に就任、この博物館をヨーロッパを通じて五大博物館の一つに仕立て上げた人物である。Wernerianという名称はAbraham Gottlob Wernerに由来している。ヴェナーはドイツの地質学者で、地球の起源と発生理論では、原始、地球は海に被われていて、その後四段階を経て現在の陸と海に分れてきた、とする仮説をとった。ヴェルナーの仮説は19世紀を通じて支配的な影響力を持ったが、彼の弟子中、とくにLeopold von BuchやAlexander von Humboldtに強い影響を与えた。

これに対し、スコットランドではJames Hutton (Oyster Clubの項参照)がいて、地球発生についての新理論を提唱した。ハットンは、現在の地質の状態を観察することから分析を始め、そこから帰納的に、太古においても陸と海の分布は、現在とほぼ同じ比率で存していたに違いないと推定した。こうした、まったく対極にあるヴェナーとハットンの理論は、当時のほとんどすべての自然学者を巻き込んで、18世紀スコットランドを二分する激しい論争が行なわれたのであった。

言うまでもなく、ジェイムソン及びヴェナー自然史協会はヴェナー理論の側に立った。これに対し、Royal Society of Edinburghに拠る自然学者たちは‘Hutton-oriented’であったと言われる。ハットンは地質学においては、必ずしもヨーロッパの主流とは言えないが、むしろ重要なことは、彼がエディンバラ・リテラーティの中心人物の一人として、啓蒙期スコットランドの他のさまざまな分野にも大きな影響力を及ぼしたことであった。少なくとも、彼が現在の地質の分析から自らの地質学を始めたことは、土地改良、農業技術改良に打ち消し難い大きな足跡を残したのである。事実、晩年はハイランド地方の地質改良と農業問題に没頭して、一生を終わった。

### III. グラースゴウ Glasgow

#### 1. Hunterian Museum of Glasgow University

参考文献 *Monumenta Romani Imperii, in Scotia, maxime vero inter vestigia valli, auspiciis Antonii Pii Imperatoris, a Fortha usque ad Glottam perducti, reperta, et in Academia Glasguensi adservota, iconibus expressa.* n.p., n.d., (1771) *Another copy, Glasgow, 1789?* [GUL Hunterian]

継続期間：1807+

創設者：ウィリアム・ハンター (William Hunter, 1718–1783)

Hunterian Museumは啓蒙時代も末期に入った1807年に、ハンターによってグラースゴウ大学に遺贈された。ハンターは、啓蒙期の3人の著名な医学学者、ウィリアム・カレン、ウィリアム・スメリー、ジェームズ・ダグラス(いずれも既出)の教えを受けた医者である。ジョージ三世の妃、Queen Charlotteの侍医として何回か妃の出産を看取った。1768年、ロンドンのGreat Windmill Streetに居を構え、ここに展示兼講義室、解剖室、展示室を併設した。1783年に亡くなるまで、この邸宅に住み、講義をしたり、解剖をしたり、標本類の収集等に打ち込んで余生を送った。

収集は多岐にわたり、質量共にすぐれたものとなった。相当な量の絵画、版画、銅版、貨幣、メダル、宝石類、鉱石、貝類やサンゴ、化石、鳥の剥製類、昆虫、植物その他の自然誌標本、解剖学、病理学のプレパラート標本及び1万冊を超える書物と写本、稿本である。これらの収集物一切と共に、建物の建築費として8,000ポンドが大学に寄贈されたのである。博物館の収蔵品は、グラースゴウの学生や市民たちにきわめて有用であったが、とくに、エディンバラにほとんど一世紀近く遅れて開花しつつあった医学と、自然誌の教育にとっては無限の宝庫となつた。収蔵品中の書物とマニユスクリプトは、のちにグラースゴウ大学図書館貴重書部門のコア・ブックスとなり、Hunterian Libraryと名付けられている。

#### 2. Literary Society of Glasgow

参考文献 1. [Duncan, Richard], *Notices and documents illustrative of the literary history of Glasgow during the greater part of last century.* Glasgow, Maitland Club, 1831.

2. *Records, 1764–79, transcribed from the Society's minutes by William James Duncan, 1830. (MS.) [GUL; NLS, copies]* The Library of

## スコットランド啓蒙期の主要学協会、クラブについて

Royal Faculty of Procurators, Glasgow所蔵原本のコピー。

3. グラースゴウのクラブ全般について次の文献がある。

Strang, John (1795–1863), *Glasgow and its clubs*. 2nd ed., London & Glasgow, 1857.

継続期間：1752–ca.1787

創設者：アダム・スミスら12名

Literary Society of Glasgowは、グラースゴウで二番目に誕生した協会である。1743年創立のPolitical Economy Clubに遅れること10年、1752年1月10日に最初の会合を開いた。Literary Societyもまた、18世紀スコットランドを通じてみても、明らかにもっとも重要なクラブの一つである。名称にかかわらず、カヴァーする範囲が広いという点では、エдинバラのPhilosophical Societyと共に通するところがあるが、経済的問題についてはより大きな関心を寄せていたと言えよう。初日に集まった創設メンバーは12名、9人までがCollege of Glasgowの教授である。James Moor(ギリシャ語教授), Robert Hamilton(人文學), [William] · Leechman(神學), James Clow(論理學), Hercules Lindsay(法學), R. Dick博士(自然哲學), George Ross(人文學), William Cullen博士(医学), Adam Smith(道德哲學), Craig師(牧師), Richard Betham及びJohn Brisbane博士。

やがて、会員の一人がペーパーを提出し、それを読んで批評し合う、というルールが確立するが、それまでの繋ぎとして新刊本の内容紹介と書評が行われた。1月16日の会では、カレンがモーペルティイの宇宙論*Essai de Cosmologie*を書評し、次の23日にはスミスが、ヒュームの商業論*Essays on Commerce*を紹介した。新ルールの下での最初の例会は2月7日、ムーアが‘On historical composition’というペーパーを提出している。

次の2年間に会員は31名に達した。デヴィッド・ヒュームがこの間に加入してきた。例会に提出されるペーパーの内容はますます多彩になり、それをめぐって、自由闊達な討論が展開された。24歳のドゥーガルド・ステュアートが、会の議事録を読んで刺戟を受け、入会を申し込んだのは1777年3月7日。その時彼が是非読ませて欲しいと持ちこんだペーパーは、*On the state of mind in sleep and the phenomenon of dreaming*と題する精神分析学のような論文であった。会員はさらに増大して、トマス・リード、ジェームズ・ブラック、[ジェームズ・] アンダスン、Dr. Wilson, Dr. Irvine, Mr. Muirhead, Mr. Arthurらが加入してきた。会は、商人たちにも開放されたので、著名な印刷業を営むRobert and Andrew Foulis兄弟父子も入会した。会員間には、階層や職業による差別は一切無かったように見える。1764年11月9日の会合でロバート・ファウルズは*Memoir on the discovery*

and culture of geniusについて報告し、アンドルーの方は、12月14日の例会で、‘On the first religion of mankind and the notion of chaos’というテーマで報告している。

1764年までは会は順調に推移したが、この年の終わりに運営上の最初の蹉跌が生じた。それはウィルソンの報告をめぐって起こった。12月21日にペーパーを提出するはずだったウィルソンが欠席し、次週28日には参会者があまりに少なかつたため、又もや流会となった。このことがきっかけとなって罰金制度が採り入れられた。遅刻、欠席の繰返し(続けて4回欠席すると退会処分)、予定されたペーパーを提出しなかった時、前回例会に、次回に報告するタイトルを予告しなかった時、前の週に次回の討論テーマを提出しなかった時、いずれの場合にも罰金が適用されたのである。罰金制度は時として官僚的に過ぎるほど厳格に運用され、書記さえこれを免かれることが出来なかった。毎年11月の最初の例会に、集会場所から1マイル四方に住む会員は半ギニー金貨1枚の供託金を求められ、もし予定されたペーパーの提出を怠った時は、没収されたのである。

これほど厳格に運用しても、年末が近くなるときままで会紀が乱れ、罰金を取られても欠席する会員が増えてきた。そしてついに、1778年の12月25日がやって来た。Literary Societyの公式記録はこの日で終わっている(参考文献2)。席上次回を2週間先に延期しようという動議が出され、リード、アーヴィン、アンダスン、アーサーら会則遵守の少数派が強硬に反対したにもかかわらず、賛成多数で可決された。本来ならば翌79年1月1日が報告予定日であった、アーサーは、スコットランド人気質を遺憾なく發揮した。是が非でも協会規則を守るのだと頑張って、書記にも記録に留めるよう指示し、1月1日に報告を決行したのである。当日、アンダスン、リード、アーヴィン、ハミルトン(Robert), Mr. Graham (Robert?)の5人が同調出席した。次週8日は、1日の会が合法か否かをめぐって会は真二つに割れた。合法となれば当日出席しなかった者全員に罰金が処せられる。結局、会は大多数が12月25日の報告者リチャードスンを議長と認めることによって、1月1日の会を非合法と見なしたのである。(前回の報告者が次の議長を務めることに定まっていた)。アンダスンがとりなし、9項目にわたる延期反対の理由を議事録に取り入れることによって、この場は収束した。が、二度と再び会の空気が元に戻ることはなかった。この時期すでにスミスはエディンバラに居を移し(1764年外遊)、ヒュームは没していた(1776)。その後何らの記録を留めることなく、Literary Societyは消えて行った。David Murrayは、18世紀末まで続いたと言っているが、証拠はない。19世紀はじめにLiterary and Philosophical Society in the University of Glasgowなる会があり、Literary Societyの後身ではないかとも言われるが二つを結び付ける根拠はない。

### 3. Political Economy Club

継続期間：1743-？

創設者：アンドルー・コホラン(Andrew Cochrane, 1639-1777)

グラスゴウの商業活動が活発になった結果とも言えようか、1743年にPolitical Economy Clubが創設された。農・産業改良団体を別にすれば、啓蒙期中唯一の経済専門の学協会である。グラスゴウの市長であった、創設者コボランの名を取って、別名Cochrane's Clubと呼ばれた。ジョン・レーの評言では、‘probably the first political-economy club in the world’ と言うことになるが、<sup>1)</sup> 1702年にやはりスコットランドで同じ事が試みられている。のちにAdvocate's Libraryの館長になったJohn Spottiswoodeが、スコットランドの産物や貿易について研究するための会を組織しようとしたが、これは不発に終わった。

18世紀スコットランドが生んだ一個人の著作として、後代にもっとも大きな影響を与えた著作は、言うまでもなくスミスの『国富論』である。政治経済学をはじめて科学に仕立て上げたこのスコットランド人は、Cochrane's Clubのメンバーであった。スミスが加入したのは1751年、以後グラスゴウに居住した13年間を通じて会員であり続けた。その期間は当然のことながらスミスが、グラスゴウ大学の道德哲学教授の座にあった1751年11月から1764年の1月までの期間と重なる。スミスが経済学に対する興味を喚起しようとした努力は、かなりの効果を収めたと思われ、会員の一人、グラスゴウの著名な印刷業者ロバート・ファウルズの次のような感想をスコットが書き留めている。'[Foulis] found it worth his while to reprint such works on economics as those of [Thomas] Mun, of [John] Law, and of [Joshua] Gee on Trade and Navigation, Sir William Petty's Political Aithmetic, and Sir Joshua Child on Trade.'<sup>2)</sup>スミスもこの会における商人たちとの交友を通じて、『国富論』の執筆に必要な情報や資料を手に入れ、商取引上の細かい実務知識を獲得したのである。

スミスはこの後、グラスゴウ大学教授のポストを辞して、Henry Scott, 3rd Duke of Buccleuch およびその弟Hew Scottの家庭教師として、1764年から66年までのヨーロッパの旅に赴く。そして、おそらく、トゥールーズ、ジュネーヴ、パリと、バッклー公爵とともに旅を続ける間に、成熟しつつある資本主義的マニュファクチャの現状を目撃し、つぶさに分業過程を観察する機会を得たのではないか、と言われている。しかし、スミスの後日の体験を基礎づけるものとして、Political Economy Clubを舞台とする、当時の発展しつつあるスコットランド工業と活気に満ちたビジネスマンたちとの接触が、『国富論』執筆のための材料集めに十分役立つものであったことは、次のアリグザンダー・カーライルの記録によっても明らかであろう。“Few of [the Glasgow merchants] could be

called learned yet there was a weekly club, of which a Provost Cochrane was the founder and a leading member, in which their express design was to inquire into the nature and principles of trade in all its branches, and to communicate their knowledge and views on that subject to each other ... I became well acquainted with him [Cochrane] twenty years afterwards when Drs. Smith and Wight [Andrew か Alexander か] were members of the club, ... Dr. Smith acknowledged his obligations to this gentleman's information, when he was collecting materials for his *Wealth of Nations*; and ...<sup>3)</sup>

Political Economy Club については公式記録がまったく残っておらず、会員名、終年等の詳細は不明である。

〈注〉

- 1) Rae, John, *Life of Adam Smith*. London, 1895. p. 91.
- 2) Scott, William Robert, *Adam Smith as student and professor*. Glasgow, 1937. p. 82.
- 3) Carlyle, Alexander, *The autobiography of Dr. Alexander Carlyle of Inveresk, 1722–1805*, ed. by John Hill Burton. London & Edinburgh, 1910. pp. 81–82.

『経済資料研究』第24号(1991.9.30) pp. 1-68に掲載されたものを、利用しやすく編集するとともに、いくつかの事実的な誤りを訂正した。 水田 洋